

Jaro X, N-ro 10

OKTOBRO, 1929

LA REVUO ORIENTALA



JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO



第十年

第十號

目次 (ENHAVO)

街頭に降れよ緑の星々.....	永井叔	289
海外報道.....		290
内地報道.....		292
第十七回日本エス大會記事.....		297
エスペラント初等講義.....	城戸崎益敏	302
エスペラント中等講義.....	松本清彦	304
Disvolviĝo de Esp. kaj Esperantologio	川崎直一	306
Z博士の手紙より.....	岡本好次	308
Elementa Kurso por Studo Scienca.....	伊藤徳之助	310
萬國工業大會への提案.....	美野田琢磨	311
Notoj pri l' Bibliaj Vortoj	宇都宮正	312
質疑應答.....	小坂狷二	313
Policestro Bonanima	松本・城戸崎	314
「阿彌陀經」(梵語よりエス譯)	野原休一	317
先從隗始.....		319

表紙——江上武夫 飾繪——大橋介二郎

例會兼研究會

日時場所——毎水曜午後7時から學會で
會費——無料
用書——Hamleto

本月會話練習會

日時——10月19日(第三土曜)午後正7時
場所——丸ノ内鐵道クラブ(永樂町電停
より南へ折れ日活本社横手より右折せ
る奥の二階建木造)

話者——(未定)
會費——五錢(初學者も歡迎)

常設講習會

◆初等科 (休講)
◆中等科 (隨時入會可)
日時——毎週金曜午後7-9時
場所——學會階上講習室
會費——毎月50錢(前納の事)
用書——Georgo Dandin

東京市牛込區新小川町3の15 財團法人 日本エスペラント學會



La Revuo Orienta

JARO X, N-RO 10

OKTOBRO, 1929

街頭に降れよ緑の星々

永井 叔

□ 街頭——何といふ齒切のいゝ言葉だらう。生々とした脈動であるその言葉は、森の如く静かではないが、VIVOの一切を動かす程の原動力であり、その古巣でもある。

□ 街頭——その街頭を駆けすり廻つた pioniroj の汗水を忘れては、壇上に墮落した現時宗教の形骸は、到る所に山積し腐敗して、街々を歌ひまはつた聖ルーテルの使徒的勞苦も、又村々に六相圓融を誦經しまはつた聖法然の梵士的疲勞も、今は何の報ひられる事もなく、座敷へ座敷へと墮落——さうだ墮落し去つた。ギアットの琴も韻を墮滅した！

□ 一切の宗教が街頭を忘れ果てやうとする時、天使の如く街辻に歸つて來たものは何だらう。それは天の彼方から『一切の美』を脊負つて靜かに降り立つた緑星の精である。又の名を ESPERANTO とも呼ぶのである。

宇宙の創生に先づ作られたロゴスが、あらゆる人造宗教に失望を感じて、たゞ獨り忽然として『雲水』して來た甦生のクリストであり釋尊であるこの緑語！お互はその街の天使を森に即ち詩に追ひやることは更にいゝとしても、座敷に追ひこめ、壇上にのみおひあげておく事を謹まねばならない。

□ 一街頭の樂人としてエスペラントン！の數文字を襷にかけて東都の街頭を訪ふ時、この貧しい一詩人は、エス語に對する様々な世間を見出して行く。

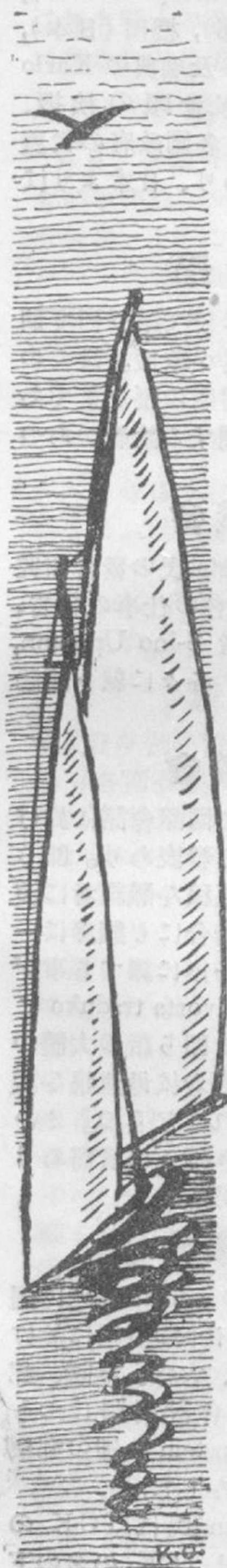
『お前一體何か。何？エスパン——あゝ豆屋か。』さう云つて樂人なる私を見くびつて呉れたのは、驚く勿れ、帝都の一 policano ではなかつたか。『あの男は外國人だよ。エスペラントンといふ國から來た男だよ。』又驚く勿れ、帝都のしかも銀座の或大きな商店の、しかも主人が店員達に教へ囁いた言葉であらうとは。HO! VENTO! HO! VENTO! シエレーの詩をオホ風よ風よと歌ひつゝあるわが聲の側から『ありや、辨當を賣んちやあるめえがなあ。』

街頭とエスペラントとが互にしつくりと Geamantoj として結びあつてしまふまでには、こんなにもこんなにも遠い。

□ しかし、樺太から、本當の“moderno”を探し出さうとして神樂坂をぶらついて居た新聞記者がモボやモガや照明やダンスホールに見あいた時『うむ、これこそが本當のモダンだ！』と云ひさま、驚き見はつたもの——そのものこそ一辻樂人である私であつたとは、面白いではないか。そして『そのもの』の背には鮮かにエスペラントン！と書かれてあつたとは！

心あるものはかくも街頭に我らの言葉を見出さうとあせつて居る。獨逸の青年運動がワンダーフォゲルとなつて街に森に歌ひ出して行つた時にこそ、彼らの前に眞のモデルノが展開し、眞の人間味が、大空味があふれたではないか。

さあ、同志よ！壇上から下りやう！あの清々としてあらたかな緑星の山頂へ登りつくために山から下りよ。森へ！そして街頭へ！かのロシア街上の盲音樂師が夜の辻々でよく巡查や娘や、將校をさえ踊らせて居るやうに、我らも街にあつて緑の奏曲もてプロブ一切の人類を踊らせやうではないか。しかも世界のあらゆる街上に於て。



海外報道

Wien に於る Antaŭkongreso

7月30日より開かる。この Antaŭkongreso は前例のない盛會で特に大統領 Miklós 氏も自ら出席さる。7月30日市役所地下室の食堂にて晚餐會あり。31日午前 TEKA (Tutmonda Esp. Kuracista Asocio) の會合あり。Sós 氏は開會の挨拶をなし、市長代理として D-ro Friedjung 氏挨拶せらる。これに次ぎ幻燈による研究報告あり、その後 Mediko-historia Instituto を訪問し Neuburger 教授は研究報告朗讀さる。午後は TEKA は Koblenz 山に於て會の組織問題について協議した。

この Antaŭkongreso に於ける最も重要な國際エスペラント博物館の開館式は8月1日行はれた。大統領 Miklós 氏及其他各大臣等の出席あり。先づ國立圖書館長は獨逸語にて『我が國立圖書館は國際エスペラント博物館を有する事を誇とし名譽とする。必ずや幾何もなくして當博物館はエスペラントの意義に相應する丈の物品を所有するに到るならん云々……』なる挨拶をなし、これに次ぎこの博物館設立に盡力せられた Steiner 氏はエスペラントが到る所當然の事柄となるべき近い將來に於てはこの博物館はエスペラントの發達の過程を物語るべき貴重なるものとなるであらうと述べた。最後に Miklós 大統領はエスペラントの重大なる使命を説き、エスペラント博物館の設立を祝し、最後にエス語で國際エスペラント博物館開館を宣言し、拍手喝采裡に開館式は終つた。

第二十一回萬國エスペラント大會

今年大會は8月2日より9日まで Budapest 市に於て開かる。参加者数は約 1300 名日本人では進藤靜太郎氏、櫻田一郎氏だけが分つてゐる。

大會懇親會

8月2日夕 Restoracio Stefania-kiosko にて催された。この日から大會中毎日 Magyarország 紙は Esperantopago を設けて大會報道をなした。

大會開會式

3日午後に開かる。會場前には二十五名の Knabskoltoj が迎へた。この skoltoj は参加者案内の爲に特にエス語を學んだのである。一同入場すると Rákoczi マーチの奏樂あり

それに續いてハンガリー國歌が奏せられた。昨年大會の會頭 Schoofs 氏は開會を宣し、大會々頭として J. de Mihalik 教授を、副會頭には D-ro Loránd (ハンガリー)、S-roj Carlos Domingues (ブラジル)、Boutwood (イギリス)、Silvestriev (ブリガリヤ)、Guéritte (フランス)、Behrendt (ドイツ)、Čen (支那)、櫻田 (日本)、Felix Zamenhof (ポーランド) 及瑞典の Karlo 殿下を推薦した。これに次ぎ會頭の挨拶、Julio Baghy 氏の詩の朗讀、各國政府の代表の挨拶、各國の代表の挨拶あり、日本よりは進藤靜太郎氏が挨拶せらる。

夏期大學

3日午前音樂學校の講堂に於て第五回夏期大學の開講あり。學長は Kiso 教授。最初の講義は G. Caunto 氏の『法醫學の歴史』であつた。次は4日午前宗教に關する講義があつた。

第一回協議會

5日9時15分開かる。Krysta 氏の發音研究報告、Kreuz 氏のラヂオ委員會の仕事の報告、伯林の講習に於ける受賞者 S-ino Upmann, F-ino Solländer の紹介あり、各々に就き議論を争はす。

第二回協議會

7日朝開かる。Kreuz 氏は國際會議に於けるエスペラント翻譯に關する發表あり。即ち『理想的には演説者は豫め原稿を翻譯者に渡す事である。之が不可能の場合にも翻譯は一部分宛でなく、演説全體を一度に譯する事が望ましい。それには話を laŭvorta traduko せせずに libera traduko とする即ち話の大體の意味を譯すことである。翻譯者は母國語を話す如くエス語を話し得なければならぬ』といふのである。この問題につき種々の質問あり又多くの意見も述べられて終る。

第三回協議會

8日午前開かる。ICK の neŭtraleco に關する宣言、ユーゴスラヴィヤの鐵道に於けるエス語の使用、發聲映畫、大會、會議、郵便電信、Esperanto-ŝlosiloj、會計問題につき協議す。Kreuz 氏は Lichtenstein 公國の郵便に於るエス語の使用を報告をした。

次に學士院副院長 Warden 氏は ICK の prezidanto Marchant 氏より ICK の名の下

にエスペラントに對する貢獻の爲に賞牌を授けられ、Sebert 將軍、Cart 教授、Privat 氏も同様賞牌を受けた。

Warden 氏は21回の大會中20回出席せられた事を述べ感謝の挨拶をせらる。Kureuz 氏は大臣に對する挨拶と學校にエスペラントを採用する提案に關する教育家分科會の決議を讀み可決せられて協議會は終る。この後一同は無名戰士の墓に詣でハンガリー語とエス語に書かれた花環を贈つた。

分 科 會

5日、多數分科會あり、禁酒、民俗、商業、郵便事務員、pacifisto、銀行家、旅行家の各分科會、8日にはfeministoj、學生、法律家、バハイ教徒、新聞記者、菜食主義者の分科會があつた。その他3日にはEsperantistaj Pan-eŭropanoj、盲人エスペランチスト、ILEPTO (郵便局員)の會が開かれた。

ブダペスト市の招待會

5日午後大會參加者はGellert-hoteloに招待さる。市會議員Purebl氏の歡迎挨拶に次ぎエスペランチスト代表としてLCKのMerchant氏の感謝演説あり、一同歡談に時を過した。

音樂會觀劇會

4日夕例年催されるInternacia Kostumbaloあり各國衣裝の美を競つた。今年は特に多數の婦人參加者があり、審査員を設けてMiss Esperantoなる稱號を第一の美人に冠らせることになつた。この名譽を得た美人はエストニア、タリン市のVeronika Ekstaといふ人で最もダンスを好み、三國一の花婿たるべき幸福者は彼女をエストニア・エスペラント大會に出席させる金を持つてゐる人、又ダンスの出来る人、歌劇、アメリカ映畫、小説に興味を有する人でなければならぬさうである。この外にVic-Miss Esperantoとしてはスペイン、マドリッド市のVincenta Garcia Aguirre嬢とブルガリヤ、ソフィヤ市のNelly Benčeva嬢の二人が選ばれた。尙外に二人賞品を貰つた。

5日夕市の招待會後Hungara Artvesperoが開かれた。序曲、獨唱、合唱、舞踊、獨奏等巧みなプログラムで行はれ、特に歌劇歌手Margareto Kéthelyi嬢のエスペラントの歌は最も一同の注目を惹いた。

7日觀劇會開かる。エスペラント詩人Julio BaghyのSamumo、喜劇La Kronprinca

Ĉambro, En la drinkejo, Vinrikolto en Badaĉonの演出があり、何れも大成功を収めた。

この劇の後に盲樂人の音樂會が催された。この演奏はラヂオ放送せられた程で見事な出来榮であつた。

最後の音樂會は8日夕同時に二ヶ所に開かれた。一はHungara Esp. Societo Laborista主催のもので、挨拶、朗讀、合唱、體操ダンスの順序にプログラムは進んで公衆に對して大いに宣傳になつた。他はMargareto 島上に於ける交響樂演奏會である。

遠 足

6日、ダニユーブ河を船で山と土耳其統治時代の廢城で名高いVišegradへ遠足した。この日は曇りで時々雨が降つたが一同皆満足に一日を過した。夜はOndbanejo (光線浴場?) Gellert-hoteloに招待せられ反射器の光線の下に連日の疲から恢復した。

大會閉會式

第二十一回萬國エスペラント大會も9日閉會式によつて幕を下すことになつた。午前9時半Merchant氏起つてBudapeŝto同志に對する感謝の辭を述べ、次に準備委員會長Mihalik氏の答辭あり。その他數氏の挨拶があつた。Stettler氏はWien大會の缺損によつて破産した數氏を救済する爲に廣く義捐金を募集する事に決したので、この爲に盡力を乞ふ旨を述べた。義捐金は少くも3,000 sv. fr.に達するべきである。Dubois氏は1932年の大會をParisに招待し、Karsch氏は來年Dresdenに開かれるドイツ・エスペラント大會に招待した。來年大會の招待をする市がなかつた爲かFelix Zamenhof博士は毎年大會を開く必要なし、隔年に開くべしと述べられたが恐らく來年は獨逸のKöln市で開かれる事にならう。この件はドイツ・エスペラント協會も承認しKölnのエスペラント會でも可決せられたのでICKの決定を待つばかりである。最後にMerchant氏の閉會の辭があつて大會は終りを告げた。

例年の大會ではプログラムが盛り澤山に過ぎるこのplendoが絶えなかつたが、今年も次から次へと休む暇がなく、或は同時に重なることもあるので悉くに出席するのは不可能であつたがそれだけBudapaŝtanojのkomplezemoは大であつたわけである。第二十二回はKölnへ。

内地報道

★第六回九州エスペランチスト大會★

——黒ダイヤの都大牟田にて・参加者百名の盛況——

九州エスペランチスト聯盟は地方に於ける最も統整されたるエスペランチストの聯盟であつて、毎年その大會を催し、決議を次回の日本エスペランチスト大會に齎すこととしてゐる。最近 8月25日福岡縣大牟田市に於てその第六回大會が開かれた。

★第一日 8月24日 學術講演會

午後7時より第二公會堂にて學術講演會を開く。劈頭大牟田エス會々長植田半次氏は職掌柄 humorajo たつぷりな肩のこらない衛生講話に聴衆の頤を解き、次に

1. 淺田一博士「最近の科學的犯罪捜査」を題して興味深き話あれば聴衆の中にはノートに鉛筆を走らす者もある。

2. 大島廣博士「生物學の國民性と國際性」に關し動植物の話より國際語の必要を暗示し

3. 磯部教授「國際語エスペラントの輪廓」を語る。講演半ばにして突然停電。暫く會場は暗黒であつたが、磯部氏少しも動ぜず朗々としてその所説を進め聴衆又靜肅にして咳一つ起らず辯士と聴衆との呼吸相合して涙ぐまじきまでに感激深い情景を呈した。最後に

4 伊藤教授「kelkaj pensoj」(エス語演説) 通譯 三井炭坑勤務 中川年男氏の演説はその流暢極りなき演説に絶大なる感銘を與へて10時散會。



La VI-a Kongreso de Klusiu Esp. Ligo. (24-25/VIII)

大牟田市に於ける第六回九州エス聯盟大會

この夕集るもの約五百。全く眞面目なる intelligentulo にて大牟田にて始めて見る盛大なる學術講演會であつた。

第二日(25日) 聯盟總會

明くれば日午前10時初秋の風かほる大會々場に開會の合圖を告ぐる振鈴高からに響き渡るや九州の各地より insigno を胸に standardo なかざして集つて來た同志約百名は大會委員

に導かれて着席。岡田委員開會を宣し君が代 Espero の合唱の後、準備委員長荒木遜氏エス語にて挨拶を述べ會長、議長を推薦。乃ち會長植田半次郎氏立つて邦語にて挨拶をなせば、次で議長永松之幹氏の saluto あり同時に江口廉(福岡)、淺井時雄(大牟田)、富松正雄(長崎)の諸氏書記に任命せらる。以下議長の司會の下に地方代表の挨拶に移る。

福岡(武谷氏) 長崎(富松氏)
 中津(石丸氏) 八屋(上田氏)
 小倉(田中氏) 戸畑(林氏)
 直方(田江氏) 久留米(勇氏)
 熊本(山本氏) 鹿児島(田中氏)
 下関市(中山氏) 三重縣(南氏)
 佛教濟世軍(中西氏)
 東京 SAT. (永濱氏)

次に江口氏18通の祝電を披露。それより亡くなられた同志諸君の爲に一同起立默禱。次に議事の徹底を期するために saluto 以外は邦語によることを決し提案の審議に入る。

(1) 久留米エス會加盟の件。

(2) 朝日新聞の英文日本號の如きエス文日本紹介書の發刊を本年九月東京に於て開かれる第十七回日本大會に本聯盟の名に於て提案すること。(本部提出)

(3) 聯盟費用負擔の件

(4) 本年九月東京に於ける日本大會に出席する本聯盟會員に本聯盟代表を委任する件。

(1)(2)(4)は萬場一致通過(3)は有志の寄附にまつ事となる。尙議長の希望として「月刊長崎の青年」は青年團の機關紙なるもエス語關を有する日本有数のものであるからその發展の爲支持せられたき旨を語りて、五分間演説に入り大島、淺田博士及び南氏所感を述べ Tagigo の合唱にて閉會。

中食後紀念撮影。一方では福岡からの librosservo。一しきり話がはづんで和やかな大會氣分が味ははれる。それより一同用意の自動車に分乗綠星旗を翻して先づ四山堅坑見學。近代科學の粹を盡した設備を見學、車を廻して築港に到り nigra diamonto の輸出、積込設備に驚く。特に三井側の好意により汽艇に乗つて三池港内外を周遊し萬斛の涼味を喫し再び車を返し五時より第一公會堂樓上の懇親晚餐會に臨む。出席七十名。岡田氏の挨拶の下に宴に移り用意されたる福引に一同腹の皮をよらす。「長崎の高原先生」は水を飲めのためで水瓶とコップ。「福岡の江口さん」は聯盟のカスガイで金物が當つた。次で村上知行氏の印象深き parolado あり、結極大牟田に來た事は大無駄でなかつたこと好感を示し、大阪外語の田中政夫君の馬來語の話に續いて馬來の歌まで出る。自己紹介で一巡して最後に伊藤教授の音頭にて「エスペラント萬歳」を三唱して目出度く大會の幕もここに閉じて、停車場に一同を見送る。到る處綠星旗の下に zumado, エスパーロの合唱起る。かくて發車の相圖と共に「サヨウナラ、來年は中津で」。

東京

アルヂエント・ケンシード(銀座明治製菓階上にて) A.K. の最近の隆盛はすばらしいものである。毎回新しい顔ぶれがあつて益々その意氣を示して居る。第三回總會(九月六日夕)には出席者其の數二十名には満たなかつたが丘博士の出席に、大空詩人永井氏の出現を加へ、エスパーロ・タギーヨの合唱は滿場の耳目を集中して大いに綠の雰圍氣を彌益した。尙十月の總會は十二日第二土曜日午後七時)に催しますから多數御出席を。

★ロンド・デ・サモバーロ(神田東洋キネマ前、サモワールの家にて)喧騒の神田の街にもこんな落着いか場所があるかと思はれる様な靜かな 我々 Esp-istoj には——喫茶店がある。圖らずも最近多數の Esp-istoj が集まる様になりザメンホフの肖像もかゝつてある。會合日は毎週月曜日夜、都下の Esp-istoj は一度は訪れねばならぬ處。

弘前

弘前エス語研究會主催、谷山あゆむ氏指導の下に9月5日から14日まで十日間初等講習を市内、今泉書店二階にて開いた。參加者十名、落伍者なく終了。

同14日終了茶話會とエス會の臨時總會を開いた。會名を改め「研究」を除いて弘前エスペラント會とした。來會者二十名、盛會。今後毎週一回讀書會を開く由。弘前高校のエス語講習は10月初から行はれる。

(弘前市土手町弘前エスペラント會報)

札幌

エスペラント會では今回美麗なるマツチペーパーを作製し盛に宣傳に利用することとした。希望者は札幌北岡西七 荷野廣道へ。

函館

エスペラント會(函館エスペラント聯盟とは別個のもの)にては8月3日夜函館市教育會主催の下に公會堂にて長崎醫大の同志淺田一博士の「科學的犯罪捜査法」「綠の旅」なる講演あり。第二部に先立ち、當地の同志吉田榮氏は井上通則氏の通譯にてエス語演説をなし、會場入口にてはエス語趣意書、宣傳ビラを配布し、會衆へ多大の感動を與へた。

8月12日より26日まで函館日日新聞講堂にて第23回講習會を開く。講師井上元則氏。講習生17名。8月21日終了式を舉行、黒石の青森縣エスペラント聯盟に出席せし佐藤、吉田氏の報告ありたり(寫眞參照)。火曜會話會は復活河邑、井上氏宅にて、木曜一般研究會は日日社にて亘理氏指導す。(小田島氏報)

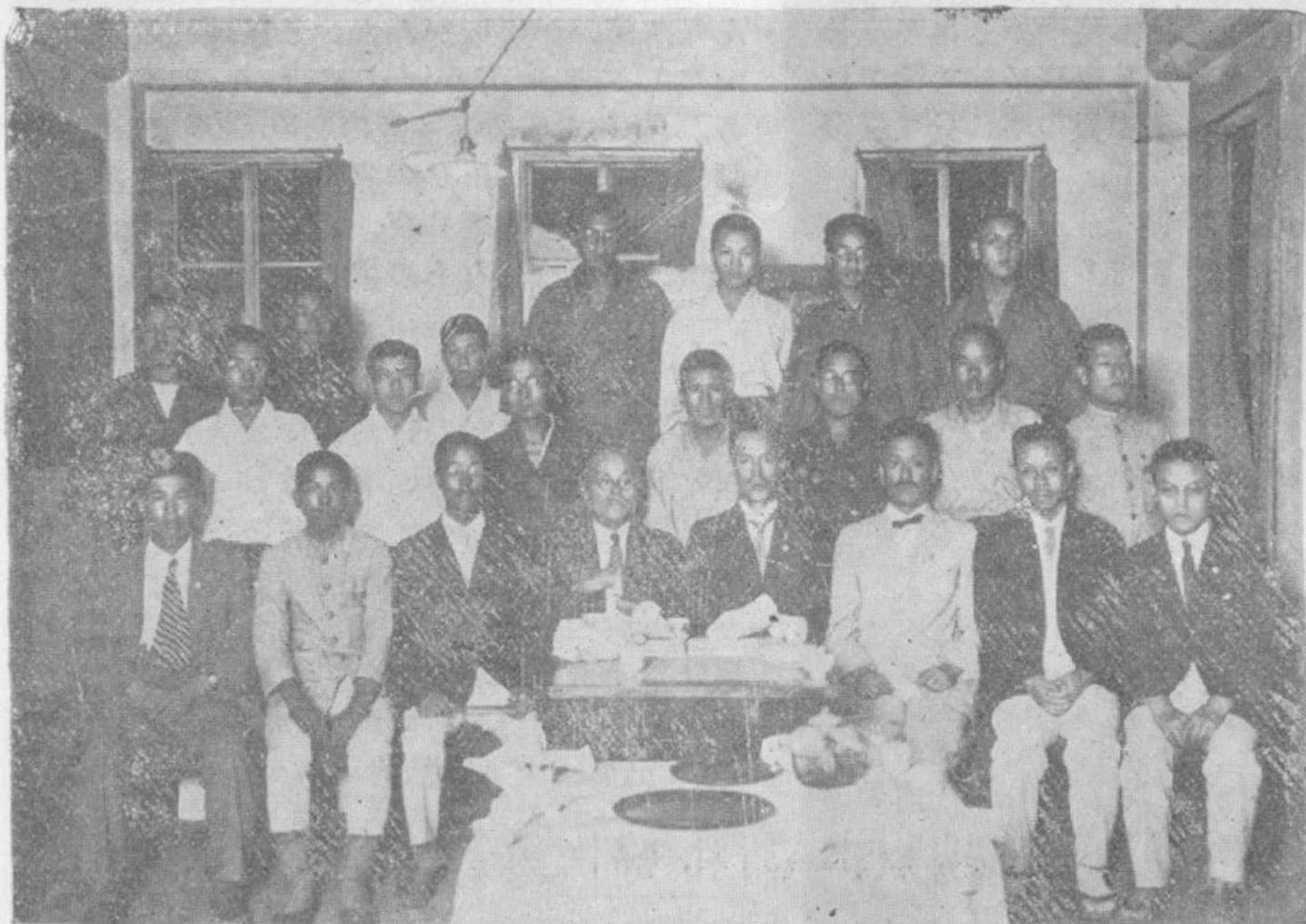
長崎

「長崎の青年」については屢々本誌上に紹介せられたが今度編輯長秦氏の御好意により今迄謄寫版刷であつた倶楽部の機關誌 Verda Hejmo が活字となつて「長崎の青年」の一頁を占めることとなつた。同誌はエス語欄を設けた爲に各地より誌友が續々出来て来るので最近再びエス語の頁を増し約5頁を割愛し有益なる記事讀物をのせてゐる。最近號へは「日本人と文通四年間」淺田博士の“Verda Letero”朝日新聞に掲載せられて好評を博したシナリオ「靈の審判」の高原氏の名譯も寫眞入にて一頁宛のつてゐるからエス語研究者には興味あるものである。

定價は一部5錢、一ケ年60錢。申込は長崎市役所へ。

小倉

9月5日商業會議所にて宇都宮氏其他熱心なる大本教徒に依る展覽會開催、入場者三百名餘、盛會裡に終了、當日エスペラントの大宣傳あり學習を初むる者十數名。田中國夫氏の Kunveno は目下 Karlo を終了後 Marta 輪講中。小倉商業の熱心な同志松島君同中學の藤勝君の盡力に依り同校にエスペラント會建設努力中。Angla Lingvo を盲目的に強ひる instruisto もおつつけ「貢ふた子に教へられて淺瀬を渡る」と言ふ様な調子で目覺めるだろう。



Post Esp.
Kurso en
Hakodate.

函館に於ける
講習會
紀念撮影

東京學生エスペラン チスト聯盟 第四回總會

日本醫大エス會招待にて9月14日15.5時より同校講堂にて開催。参加校は慶大、早大、東大、東高齒醫、明薬、東薬、物理、東高、成蹊高、日本醫大等で58名の出席者があつた。會長西博士、外來賓として小坂、岡本、波多野の諸先生並に日本醫大の長澤、齊藤の兩教授の御出席があつた。エスパーロ合唱後日本醫大の佐竹君の Malferma saluto に初り各校エス會代表者の挨拶あり又來賓諸先生の有益な御話に一同感激を以て傾聴した。次に記念撮影をなし直ちに晚餐に一同舌鼓を打つ。次いで審議に移り議長として松本君を推戴。先

づ聯盟例會の次回の當番校を明薬と決定、その他来るべき廿一、二、三日の全國エス大會の分科會雄辯會の協議、會員相互の懇談等あり。先づ小野田君の主唱により科學者分科會。城戸崎君の主唱により學生分科會成立し、既定の小數な分科會に二つを加へることとなつた。次に、學生雄辯大會へ聯盟加盟各校より少くとも一名を出席せしむることを決議したが、色々の理由でこれは實現を見ずに終つた。乍併此總會は大會一週間前に催された爲、大會に關する色々の事項が聯盟の盡力によつてズンズンはかざることとなり、非常な成功を収めた。鵜田君の Ferma saluto 後一同起立して Tagigo を合唱し盛會裡に19.5時散會した。

最後に當日レコードを持參された伊藤、關君の好意に對し感謝する。



La IV-a Kongreso
de Tokia Studenta
Ligo Esp.

日本醫大での
東京學生聯盟
第四回總會

★第四回北陸エス大會豫報★

主催者 北陸エス聯盟 高岡エス會
開催地 富山縣高岡市 水波佛教會館
期 日 11月10日(日曜日)午後一時
大會 Programo
開會の辭
各會代表の挨拶
聯盟報告
議事その他
Promenado en Takaoka Parko. 午後3時
半—5時
Amikiĝkunmango. 午後5時—7時
大會紀念宣傳講演會(高岡高商音樂部應援)
午後七時より平米町小學校講堂にて
費用 大會參加費 50 錢 晚餐會費 1.00 圓
大會事務所 高岡市小舟町三七奈良榮二方

★第六回關西雄辯大會豫告★

主 催
京都學生エスベランチスト聯盟
會 場
第三高等學校尙賢館
日 時
11月10日午後1時
御希望の同志諸兄は下記事項を記入の上
『京都市第三高等學校エスベラント部』
へ御申越下さい。
1) 演 題
2) 氏 名 (及グループの名)
3) 住 所
尙演説は勿論エス語で十五分間以内の事。

(daŭrigo de la p. 311)

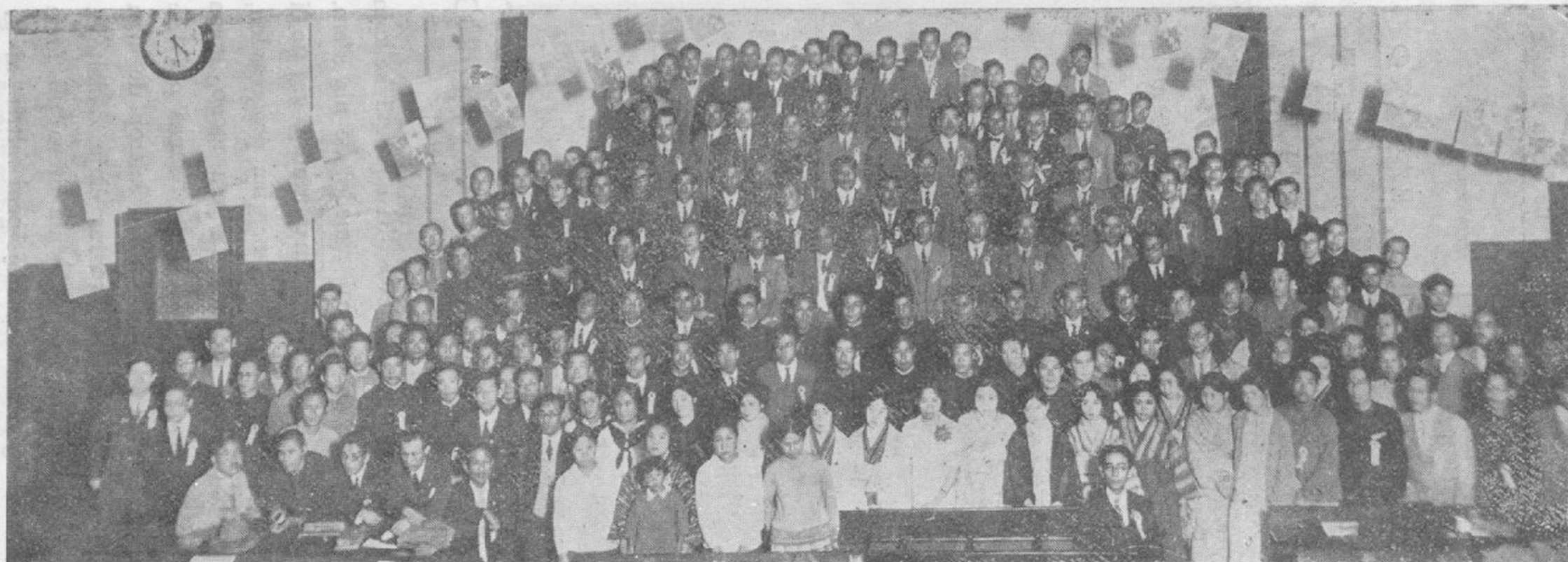
S-ro Ernst Pilz (ing. D-ro tekn.) Aussig,
Ĉek. Slov. Resp.,
S-ro Takuro Ikoma, meĥanikisto, Kobe,
S-ro Ludwik Kutschner (administranto de
Pola Esp., Krakow, Polando,
S-ro T. Kuŭahara, tekn. studento, Toohoku
Imperia Universitato,
S-ro K. Ŝiŝido, tekn. studento, Kioto Im-
peria Universitato,
S-ro Leon Moissenet, eks. ŝtata vojinĝ., 17
B-ard, Heurteloup, Tours, (I et L),
Francujo,
S-ro E. Jouis, ing. agricole, 19 rue de
Lestanville, Bihorel-lès-Rouen, Francujo,
S-ro Ilija F. Puhalo, fervojoficisto & vic-
prez. de I.A.E.F., Zagreb, Jugoslavujo,
S-ro T. Itoo, prof. de Kiuŝu Imperia Univ.,
S-ro R. Eguĉi, Daimjomaĉi, Fukuoka.

[第311頁 "Zamenhofの手紙より" の續き]

4

...En la fino ni devas diri ankoraŭ kelkajn
vortojn pri la financaj rimedoj de nia afero.
Ili estas bedaŭrinde tre malgrandaj, kaj tio ĉi
forte malrapidigas nian energian progresadon,
por kio antaŭ ĉio estas necesa **mono, mono**
kaj **mono**. Preskaŭ la tuta financa pezo de
nia afero kuŝas nun sur la ŝultroj de unu
oferema amiko, kiu kovras ĉiujn deficitojn.
Ni petas la amikojn de nia afero pli forte
subteni ĝin finance kaj peni altiri al ĝi
financajn fortulojn.....

(Prospekto, "La Esperantisto", 1893; O.V.
II. 67)



〔上 圖〕

La XVII-a Kongreso de
Japanaj Esperantistoj.

第十七回
日本エス大會

中央中村老博士、右隣美
野田氏、左隣由里氏、後
秋田氏



〔下 圖〕

Novaranea Trupo, kiu ludis
la komedion en la
XVII-a Kongreso.

大會餘興喜劇出演者

右より K., O., M., J., Iŭ,
It., O. の諸氏

第十七回日本エスぺラント大會の記

【注意】いづれ昨年の bona ekzemplo にならひ大會 protokolo が本誌の附録としてでる筈ですから本誌には precize といふより「新聞報道」式の報道としてこゝに速報致しました。
★第一日(九月二十一日) まちにまつた大會第一日が來た。二三日前の霖雨なほ霏々としてやまず惠まれざる天候をうらむ同志の心はおもひ。しかし之をて見方一つだ。この雨にもめげずに集ふ同志こそ眞の同志だ。この雨こそ彌次半分に參會する人々をふるひ除いてくれる惠の雨とみてもよい。

綠星旗翻る帝國教育會館には既に十二時前に準備委員連によつて着々準備が整へられる。ぞくぞくつめかける參加者の群。入口の受付係が轉手古舞。エレベーターが上る。四階へ。Kongreslibro と名古屋の白木欽松氏寄贈の「おみやげ」が渡される。「一部一錢」の大會新聞がさぶ様に賣れる。廊下にひろげられた洋書和書の賣店には人の波がうごく。會するもの約二百名。

14時 E pero の合唱によつて大會發會式はいさゝか厳かに開會。準備委員長美野田琢磨氏の挨拶は悠揚せまらざる態度。さすが二十年の古つは者さうなづかれる。同氏の指名により大會名譽會頭を中村博士に由里忠勝氏を會頭に堀真道、守隨一氏を副會頭におしました。次いで名譽會頭中村精男老博士が演壇に上られると拍手滿場をゆるがす。白頭、古稀血氣にはやる我等若者のおさへとして老博士の風采。

我國エス界の Privat たる由里會頭登壇。一場の挨拶の後書記を任命。ついで地方會代表の salutoj に移つた。或者は熱烈火の如き熱辯を或者は徹水の如き能辯を揮ふ。年一年と地方代表の salutoj が立派な洗練されたものになつてきた。今年のなごはこれ一つ残らず實に立派な大雄辯であつた。

青森縣エス聯盟	高木岩太郎
門司エス會	片村松之助
名古屋エスクラブ	三輪義明
名古屋エス研究會	新井憲一
名古屋エス協會	下村鑛造
名古屋鐵道エス會	西脇弘道
柏木ロンド(東京)	法花暉
金澤エス會	池田善政
大阪エス會	安田龍夫
神戸エス協會	宇都宮 正

京都エス學生聯盟	桑原利秀
東京 SAT 團	泉 茂雄
三重縣一志エス會	喜多川 基
三重縣エス聯盟	林 好美
三重縣紀北實踐女學校エス會	

東京エス俱樂部	小林留木
クララ會(東京)	栗飯原 晋
日本エス學會	平川さだの
	松本 清彦

次に書記により祝電祝辭の朗讀。

次に記念撮影をなす。この時分になつて雨が小降になつてきたので一同はつとした。これから第二會場たる多賀羅亭にむけ三々五々出發した。

第二會場たる多賀羅亭階上には既に百數十各の食卓が用意されてゐる。一刻の猶豫もなく豫定通り 18 時に食事開始。

ナイフが動きフォークが跳る間に親しみにみちたエス語のさゝやきがあちらでもこちらでもきこえる。deserto に入つて由里會頭の指名にて須々木要(米國から最近御結婚のため歸朝された)、Roscoe、長谷川理衛、瀬川重禮、林好美の諸氏が各自外遊中の感想その他について得意の熱辯をふるはれ會衆一同の氣分はいやが上にも昂奮する。

19時よびもの、餘興開始。東京學生エスぺランティスト聯盟有志の合唱にて初まる。Tilio, Kanto de Migrado, La Vojo. ついで大空詩人永井氏のマンドリン獨奏。a) アンセラスの暮鐘、b) GD 線上の小曲、c) 荒城の月、d) 表現曲あらし(雨! 風! 警鐘! 悲鳴)、e) Tagigo (打弦法による)。いつもながら同氏獨特の奏法に誰しも感嘆をくあたはず殊に地方からでゝこられて初めて同氏の音楽をきいた人々には特に奇異の感と驚嘆を之久しくした事と思ふ。

ついで先年の東京大會の芝居に則つて新アラネオ座(先年のはアラネオ座とよんだのでこれをまれて今年は新アラネオ座とした。アラネオは蜘蛛 araneo で、くもなくやつてのけるといふ意味でなづけたものだそう)一團のエスぺラント語劇。原作は佛國の George Courtrine のものでそれを岸田國士氏邦語譯より松本、城戸崎兩氏が翻譯した Unu-akta Komedio "Policestro Bonanima". その内容は別頁に掲載した故それで御覽願ひたい一座の俳優は

署 長……………岩田宗一郎君
 フローシヨ……………松本清彦君
 フローシヨ夫人……………岡本愛子夫人
 ブルロツク……………城戸崎益敏君
 男……………小野田幸雄君
 ラグルナーヨ……………伊藤己酉三君
 ブネーズ……………山本泉君

俄仕立の素人俳優の一座であつたが九月に入つてから一日おき位に猛練習をつづけたのでメツキリ上手になつたが當日の出来栄は練習の時にくらべて數段の好成績。あれなら玄人跳足の腕前と到る處大喝采。地方からきてゐる同志の方々から「地方巡業としては」と歓迎されるほどの有様。

皆々豫期しないほどの上出来で Esperanta Atmosfero はいやが上にも昂められた。本大會は前回の東京大會よりも一層参加者相互の親善と distriĝo に重點をおいたもので大會をこの上なく愉快な催とする事に腐心したものである。我々はエスペラント大會といふものはこういつた同志の親睦融合を第一の devizo としたものにしたいと思ふのである。勿論もつと serioze に相談すべき問題もあらうがそんな風なものむしろ別の機會にゆづり大會は單に對外宣傳でもなく内部の親睦を計るのが第一と思ふのである。内部の親睦なしには我々の運動は完成しないものであると思ふ。

かくて20時を以て大會第一日の幕は無事にこぢられた。

★第二日(九月二十二日)

生憎の秋雨は今朝もまだ降りつゞいてゐる。「午後霽れる」といふ天氣豫報に勇氣百倍9時から始まる分科會場たる多賀羅亭へ。藥學分科會は既に一昨晚(二十日の晩)日本橋の開運ビルデングの興樂で開催され醫學分科會は同日10時からお茶の水文化アパートで別に會合を催す事になつたので多賀羅亭での分科會は學生、自然科學、SAT、宗教の四分科會であつた。(これら分科會の報告もいづれ protokolo にする事故こゝには省略してのべない)。いづれも相當の決議や協定をなす事ができたこの事。SAT 分科會の方は議題多く短時間に審議できぬ事許りだつたので大會第三日にも同所で第二次の相談會をひらいて協議をつづけたこの事である。

11時半から我邦大會最初の試みである Kongresa Universitato の第一部が始まる事になり各自緊張裡にその開會をまつた。

第一部はエス語による通俗學術講演で

Lekcio I-a は理學博士丘淺次郎先生の「父と子と題する講演であつた。Universitato の始めに中央大學教授川原次吉郎氏が direktoro として挨拶をなした。

丘博士は例の諧謔をまじえた口調で「私の話は父と子と題してあるがこんな題は dramo の表題などにふさはしいが科學の話としてはおかしいかもしれぬ而し私は動物學上からみて「Naskintoj, Naskitoj」のお話をするのである」と冒頭して親にして子をしらぬもの子を養育するもの子の教育までするもの等さまざまの動物の例をとつて話された。たゞ會場の都合とでゝくる動物の名前があまりに澤山で我々に耳なれないものとの御懸念から半分エス語半分日本語で興味あるお話をすゝめられた。かくて12時半第一講義終了。中食。

13時半 Tagiĝo 合唱を以て開會。副會頭堀眞道氏司會の下に大會協議會を開催。始め各分科會の報告を聴取した。

- 1) 學生分科會——小此木貞次郎
- 2) 自然科學分科會——小野田幸雄
- 3) 宗教分科會——三輪義明
- 4) SAT 分科會——中垣虎兒郎
- 5) 醫學分科會——田邊治夫
- 6) 藥學分科會——岩田宗一郎

次いで Laborkunsido に入つて第一提案たる「萬國工業會議に對する工業家エスペランチストの建議案支持を援助する件」について桑原利秀氏より説明あり。

(これは来る10月29日より2週間東京で開催の萬國工業會議に對し東北大學教授井上仁吉、宮城音五郎其他の諸氏より同會議準備委員會に提出された決議案でこれは本誌別項記事御参照下さい。)

満場一致可決。

第二提案は Karcerio で苦しんでゐる人々でエス語を習ひたいといつて手紙をよこされる人々があるのでそれらの suferantoj のため monokolekto をしてエス語書籍のさし入れをなす事についての提案で泉茂雄氏の提案説明あり。清見陸郎氏の補足説明の後二三他の人からの質問應答がくりかへされた後小坂氏よりこれは性質上大會協議會の決議としてでなくむしろ名より實をさる意味で大會参加者はこの美舉に賛してこの際應分の monoferi をなす事としてはこの提案ありて満場の賛成によりその意味に於て参加者が應分の monoferi をなすこととして次の議題に移る。第三提案はエス文の日本紹介の冊子を出版する事についての九州エス聯盟よりの提案。畑氏より説

明あり長谷川氏はその具體的の出版等いかに考慮すべきかとの質問に對し二三問答の後 principe に aprobi された。第四提案は次回開會地の事についてであるがこれは今猶申し地方會なきため未定の儘としなるべく早く本年度大會準備委員より心あたりへ紹介の上決定する様決議す。次いで議事進行に關して瀬川重禮氏より大會は學校の夏休みを利用せよとの事について話された。

以上で協議會を終了。十分休憩の後我が日本エスペラント學會維持員總會にうつつた。堀真道氏中村博士の代りに議長席につき議事をすゝめ先づ岡本好次氏より事業報告あり次に三石五六氏より會計報告をなす。終つて鈴木正夫氏より學會が U. E. A. の delegitoj 制度に類する制度を設ける事に關し研究すべしとの提案があり。大いに考慮する事として時間切迫のためさその他に特に相談すべき事もなかつたのでそれで維持員會を閉じた。夕食後18時より當日のよび物たるクララ會有志の餘興あり。“Kion rakontas amikoj de Peĉjo?” といふ對話を主としたもので終りには合唱に早代りしてクララ會會員の殆んど全部が加つて 1) Popolvolana himno, 2) Ruĝa Standardo. を合唱した。前日の劇にも劣らぬ立派な出来榮えに一同大満足の態であつた。

次いで Kongresa Universitato の續きに入り Lekcio II-a として高層氣象臺長大石和三郎先生の“Meteorologiaj Fenomenoj” といふ演題で氣象上の諸種の現象を圖を以て示して平易單簡に話されこれ又大喝采を拍した。

次に Universitato の第二部として Esperantologio の演説に移り。第一に“Disvolviĝo de Esperanto kaj Esperantologio” の演題の下に川崎直一氏が氏一流の研究を發表され第二に「エス語名詞の“數”に關する考察と私見」なる題下に岡本好次氏の發表ありいづれも日頃の研究によつて集めた材料をもととしてエス語研究上有益な發表がなされた事は我國エスペランチストの意を強うするにたる所である。川崎氏の原稿は本誌に掲載される筈。岡本氏のは他日を期して之又發表をみる事と思ふ。

兩氏講演の後いろいろ聴者よりの 疑がくりかへされ小坂氏もそれについて意見をのべられ秋田氏、佐々城氏からもいろいろとお話があつて本當に熱心な研究會といふ感じをおこさしめた。これにて第二日も無事終了午後四時頃天氣快復し夜は既に星がまたゝいてゐ

た。

★第三日(九月二十三日)

9 時から第三會場たる丸之内鐵道クラブで次の programo により東京學生エスペランチスト聯盟の雄辯大會を催した。

— Programo —

1. Malferma parolado.
S-ro, K. Macumoto (Keio)
2. Pri unu opinio de iuj idealistoj-esperantistoj.
S-ro, M. Hata (Keio)
3. Grafo Zeppelin'o
S-ro, N. Ŝigemacu (Seikei)
4. Esperanta movado en Sendai.
S-ro, T. Kuŭahara (Tohoku-Teidai)
5. Internacia amikeco de studentoj.
S-ro, T. Okonogi (Seikei)
6. Interamikeco inter Japanujo kaj Ĥinujo.
S-ro, T. Umeda (Keio)
7. El la rememoroj pri Ĥinujo.
S-ro, Ĉ. Hajaŝi (Teidai)
8. Partoprenante la 17-an Kongreson.
S-ro, S. Ŝimizu (Meiji-Jakusen)
9. Saluto.
F-ino, Nakamura (Teikoku-Jōshi-Isen)
10. Esperantista Problemo.
S-ro, J. Ikeda (Kanzaŭa-Idai)
11. Saluto.
F-ino, E. Casey.
12. Saluto.
S-ro, T. Minoda.
13. Kelkajn vortojn al la parolintoj.
S-ro, K. Oosaka.
14. Ferma Parolado.
S-ro, K. Macumoto (Keio)

大會第三日目の呼物である學生雄辯大會は F-ino Casey, Alexander, を始め、小坂、美濃田、望月、清水の諸先生外八十有餘名の聴衆を得て盛大に開催された。大會新聞號外で豫報された通り、發會式に参加し、サルートをしてサルート(去るさ)云はれた風雨も三日目の朝には果して何處へか去つて、すがすがしい秋風が會場に宛てられた「鐵道クラブ」の講堂に流れ込む。定刻よりやや遅れて先づ雄辯大會司會者松本清彦君(應大)登壇。司會者としての挨拶を述べ、東京で一般學生の雄辯大會が催されるのは今度が始めてであるから、此好機會をさきがけに今後も度々此種の會合が催されて今日多くの學生に缺けてゐる雄辯術を練られることを希望すると述べた。司會者の紹介で先づ慶大文學部の畑君登壇。その内容豊富な演説で先づ聴衆の心を奪つた。

Restu ĉiam en laboro,

Esperanto en la koro.

Ĝis ĝin konos la homaro

Kun gepatra lingv' en paro.

Estos tiam sur la mondo.

Unu familia rondo. (el "Krioj de l' Koro")

エスペラントの普及が人類に大なる福祉を齎すものであり又直接平和の理想境を實現せしめるであらうと云ふ理想家エスペランティストの考へは誤つてゐる。蓋し世界に於ける惡も不和も言語の相違以外の原因によつて生起するからである。尤も此言語の相違は勿論何等かの意義を有し、従つてエスペラントは一つの勢力を有してゐるのではあるが。のみならず國際補助語は之を用ふる人や目的の如何によつて夫々變つて來るものである。例へば、之を用ふるものが主戰論者である場合には、國際語は武器ともなう。Lanti の云ふ如くエスペラントはそれ自身人類解放の具となり得ない。而しこれが解放者の手中にある時、その勢力は確かに有利に利用される。故に曰く「エスペラントは或時には Kuracilo となり、或時には Veneno となる。若しエスペラントの使命が人類を一個の大なる家庭的團圓に統一することであるなら、吾々は須らく之を Kuracilo として利用することに努めねばならぬ。」

次に演説者中の最年少者成蹊尋常(中學)三年生重松君喝采裡に登壇。先づ Grafo Zeppelin'o の偉業に讃辭を呈し、曾て大戰時には恐る可き武器として歐羅巴人の一大痛棒であつた斯の Zeppelin' が今度は温い國際的友誼を求めて飛來した。この事は明らかに國際思想を迅速な進歩を如實に物語るものである。

Ni, ĉiuj homoj en la mondo devas manpremi kaj klopodi por la paco de la mondo. Ho, nia granda mondo estu paca eterne kaj kiam vera paco venos en la mondon, klare ni komprenos ke la Grafo Zeppelin'o donis grandan servon al la mondo! と氣持のよい明快な語調を以て短い演説を終へた。

第三番目に遠來の客東北帝大の桑原君。「私が只今此壇上の人となつたのは、司會者の懇望もだし難く遂に唯一場の御挨拶を申上げる事を引受けたからで豫め用意を致してありませんから、その點御含みを願ひます」。と云ふ前置きで、仙臺市のエス運動概觀に移つた。仙臺市では、第十二回の大會が餘りにも盛大に開かれた爲、その後は同地の同志は經濟的にも精神的にも疲勞を覺えるに至つたも

のさ見え以前程隆盛でなくなつた。東北帝大では此五月に二十餘名の會員を得て講習會を開催したが、大學總長がその席に臨んでエスペラント賛成演説をされ、延いては熱心な同志になられた。このことは吾々の最も欣快とする處で、總長の御蔭で今後、吾々の "la urbo de arbaro" にエスペラント運動が再び隆盛になることは先づ々々憚らずに申し上げられると思ふ。」と將來に對する期待の言葉を以て演説を終へた。

第四番目の演説者、成蹊の指導者小此木君は司會者から longa parolanto として紹介され、將せるかな既定時間を過ぐるこゝ約四分、十九分間に亘る熱のこもつた演説振りであつた。「私は何某の様に決して故意に演説を長延かせようとしてゐるのではなく、如何にしたなら演説を短くすることが出来るかに腐心してゐるのだ」……と辯解してから所謂長演説に入つた。

學生の廣汎な國際的友誼を題材にした小此木君の雄辯は聽衆の期待にそむかず、重松君のそれと共に雄辯とはかくある可きかの感を深からしめ、同時に同君の國際的に亘る學生の調査に就いては何人もその熱心さに驚異の目をみはつた。

五番目の演説者慶大の梅田君は、次の林君(帝大エスクラビーダ・グループ)と同様支那問題に就いて雄辯をふるつた。「排日の理由につき一支那大學生の言ふ處を聞くに、支那が自然的富源に富み、小國日本の庇護なくして獨立獨歩し得るに拘らず、日本は日支親善を口實にしてその帝國主義の下に支那を搾取せんとするからである」と。この思想こそ排日運動の最も基本的な原理として一般支那人が寸時も忘れ得ぬ處である。梅田君は支那の日本への依存關係を一々例示して論斷し、畢竟支那は日本なくして立ち行かぬと云ふ結論を引いた。

次に帝大醫科の林君は今夏の支那訪問についての感想を、美句を連れて流麗な語調で滔々と辯じ、聽く者をしてそゞろに唐國情趣への憧憬を深からしめた。

七番目の演説者明治藥專の清水君は「大會に参加して」と題し、同校を代表して挨拶をされた。内容奇抜な挨拶振りは寔に當日の白眉であり、嚴肅すぎる會場の雰圍氣に氣持のよい動搖を與へた。

これに次いで帝國女子醫專ミネルバ・ロンドの中村嬢登壇。先づ「只今司會者からの懇請によつて少しの用意もなくこゝに立つた次

第でございますから……」と流暢なエス語で辯解し、自己紹介、ミネルバ・ロンドに於けるめざましいエス運動の進展を述べて喝采裡に降壇。

第九番目の演説者池田君は遙々金澤醫大から大會に参加されたので、司會者は好機逸す可らずと、さらへて雄辯大會の前日に内諾を得たと云ふ話。同君の流れる様な而も熱のある辯舌振りは已に大會初日の地方會代表挨拶の際一同の耳目を引いたのだが、再度演壇に立つや君の辯舌振りは更に熱を加へた。前夜の遠か仕込にも似ず、持て餘す程の内容を十餘分に亘つて淀みなく辯じ立てた。

第十番目には思ひも掛けぬ珍客が演壇を賑はすことになつた。と云ふのは、曾て東京の同志に親しく交つて長らく日本の生活を享しんでゐた菜食主義者 F-ino Eileen Casey が昨年九月故郷のオーストラリア(濠州)へ歸り、大會の始まる前日の廿日に又漂然と憧憬の日本へ歸つて來た。そして第三日目の雄辯大會に始めて顔を出したのだつた。同嬢の言ふ處によるミケ年丸きリエスベラントをやらなかつたのですつかり忘れてしまつたこの事、司會者はすかさず、Mi esperas al F-ino Casey, ke ŝi rememorigu tie ĉi sur la estrado jam forgesitajn Esperantajn vortojn. とやつたので、同嬢は久しぶりでエスベラントを口にすることになつた。一場の挨拶は簡單乍ら仲々の上出来であつた。

最後から二番目にこれも會場へ見えてから、急に一席辯じて貰ふことを頼んだ初日の議長美野田氏である。例により落つた辯論振りは學生のそれとは又別段の趣きがあり、聽衆の倦怠をやはらいた。最近の懸案となつてゐる萬國工業會議にエスベラントを採用する事に關する氏のお話は、事が耳新しいだけに一同の興味を引いた。

最後に聽衆の誰もが期待した稀代の雄辯家小坂氏が立つた。その演題に曰く“Kelkajn vortojn al la parolintoj.” Parolintoj は何が言ひ出されるかと片唾を飲み、手に汗を握つて、先生の顔を見つめる。すると“……mine rtajas kritiki……”と來たので、Parolintoj 中「我こそは」と思つたものは、がつかり氣抜けし、冷汗をかいてゐた連中(?)はホツとした。とは筆者の想像。先づ Parolintoj 一般について改む可き點を注意し、揚抑による esprimo の變化を實例によつて示し、Parolintoj にまつては勿論のこと、Parolintoj にまつても此上ない教訓であつた。小坂氏がわれ

る様な拍手を以て降壇するさ、司會者松本君は簡單に、演説者と聽衆に對して雄辯大會の成功を感謝し、“Nun, estimataj geaŭskultantoj, mi kredas, ke vi ĉiuj, sidante tiel gesinj-o ece kaj dece aŭskultante dum longa tempo, eble iom enuigis: krom tio viaj koroj certe jam flugas al la bela “Kagecuen”, kie nin atendas lazura ĉielo kaj pli gaja tempo.”と述べ東京では始めての一般學生雄辯大會を大成功裡に終つた。時に11時44分。

雄辯會後早速鶴見の花月園へむけ出發のため東京驛降車口へ集會。久し振の好天氣で豫想外に多數の参加者にて總數六十餘名であつた。割引切符利用のため(この割引切符利用も鶴見遠足の多きた faktoro である。それは鐵道の割引切符利用者が延人員百人にみたぬと罰金を徴収されるからである。)露木清彦氏が轉手古舞の忙しさであつた。14時花月園到着それより三々五々園内を散策し15時半「花の茶屋」に集合し茶話會を句す。隠し藝その他で甚だ賑ふ。

小坂氏の提議で Patro Schmid 事清水勝雄氏を Hetmano として推戴。Hetmano は絶對の權力をもつてこれの命令に服さないものは pendigota される事といふことになつた。Hetmano の命令により何か話したものが次の人を指名するといふゆき方である。

瀬川、須々木(在米漫談)、松葉(東京行進曲のエス譯歌を守隨氏と合唱)、宗近(俗謡)、城戸崎、波多野(謡の一節)、井上(守隨氏と透視術の實驗)、粟飲原(anekdoto)、中村喜久夫、松本等の諸氏等の隠し藝表藝で一日歡を盡した。

夕暗せまる18時頃花月園を出發して大會最後の Programo たる Gimbrado へ。新橋で下車。會するもの三十有餘名の一團。綠星旗數旗を先頭に隊伍堂堂銀座 strato を南から北へ。途中の交番のお巡査さん「何の demonstracio か」と驚いて訊問。西野副團長あつさり「園遊會の歸りさ」との即答にお巡査さん無言で眼をパチクリ。内心大快哉を叫びながら威容堂堂小松食堂へのりこんだ。不意の客に狼敗した食堂の主人を尻目に向け各自夕食をした、め再び隊伍をさゝのへて Argenta Kunsido でお馴染の明治製菓へおしかけた。

花月園の續きさでもいふか再び金澤の瀬川御大を Hetmano として戴き交互指名によつて歌や隠し藝のだし較べをやつた。

大會最終の Kunsido さて各自ケタをはづして21時過まで gaja babilado に終始したが三日間の疲れもで、流石の猛者連もさうさう引あげたが猶一部の energiaj homoj は Ebisu へくりだした。かくて本年の大會も無事終了をつげた。

エスペラント初等講義

〔第十講〕

LA FARMOBieno 〔農園〕

vilaĝa domo 田舎家
 stalo por bovoj kaj ĉevaloj
 牛馬の厩
 garbo 穀物の束
 garb'ejo 納屋、穀物倉
 pajla tegmento 茅葺き屋根
 tegola tegmento 瓦屋根
 vento'flago 風見
 cikonio 鴻
 nesto 巢
 kamp'ulo, vilaĝ'ano 田舎者
 ŝov'ĉar'eto 手押二輪車
 hundo ĉen'ita 鎖につない
 だ犬
 hundo'dom'eto 犬小屋
 porko 豚
 akv'o'sitelo バケツ
 (vir)bov'o 牡牛
 trogo 秣槽

tir'puto 釣瓶井戸
 meleagro 七面鳥
 (vir)koko 牡鶏
 kok'ino 牝鶏
 kok'ido 雛鶏
 vilaĝ'an'ino 田舎女
 kolombo 鳩
 kolomb'ejo 鳩屋
 kato 猫
 vilaĝa serv'isto 田舎の下男
 falĉ'ilo 大鎌
 fojno'forko 秣杈
 plug'ilo 鋤
 greno 穀物
 saliko 柳
 kapr'ino 牝山羊
 fojno 秣
 mam'o 乳房
 korno 角
 vosto 尾

ĉas'isto 獵師
 pa'ilo 鐵砲
 ĉevalo 馬
 selo 鞍
 pied'ingo 鐙
 konduk'ilo 手綱
 hufo 蹄
 ŝafo 羊
 lag'eto 池
 anaso 家鴨
 abel'ujo 蜂房
 muso 八日鼠
 rato 家鼠
 ansero 鵞鳥
 aveno 燕麥
 hordeo 大麥
 sekalo 裸麥
 tritiko 小麥
 trifolio クローバ

Somere en la granda bieno de mia amiko, ĉe kiu mi travivas mian libertempon, la vivado estas tre agrabla. “Karo”, la hundo ĉenigita, salutas la alvenanton, laŭte bojante; ĝia hundodometo estas proksime de la stalo por bovoj kaj ĉevaloj.

僕が休暇を送るお友達のうちの大きな領地では、夏、生活が大層愉快です。「カーロ」と云ふ鎖につながれた犬が聲高く吠えて来る人に挨拶を致します。その(カーロ)犬小屋は牛馬の厩の近にあります。

【説明】 somer'e=en la somero 夏には、この文では somere は直ぐ vivado に係るものと解釋した方がよろしい。en 以下 libertempon 迄は vivado を更に修飾する副詞句です。bieno=所有地。tra'vivi 世を過ごす、世を経る。liber'tempo 自由な時間、休暇。agrabla 愉快的。ĉen'igi 鎖でつなぐ。saluti 挨拶。al'ven'anto 來訪者。laŭte 聲高く。boji 吠える。proksim'e de ……から近くに。stalo 厩。

En la malantaŭa parto de la korto oni vidas la vilaĝan domen, sur kies tegola tegmento la cikonio konstruis sian neston. Ambaŭflanke estas stalo por bovoj kaj ĉevaloj kaj garbejo. Meze de korto staras la tirputo kaj antaŭ ĝi la trogo kun kelkaj akvositeloj. Maldekstre de ĝi la kolombejo staras; la vilaĝanino logas kolombojn, meleagron, virkokon, kokinojn kaj kokidojn, kaj disĵetas grenojn por ili.

【説明】 konstrui 建造する。ambaŭ'flank'e 両側に。garb'ejo 納屋。tir'puto 引上げる井戸、釣瓶井戸。akvo'sitelo 水手桶、バケツ。logi 誘ふ。dis'jeti まきちらす。

En la antaŭa parto ni vidas la lageton; bela ĉevalo, kiu portas piedingon kaj kondukilon staras kun siaj hufoj en la refreŝiganta akvo, en kiu naĝas anaso kaj anasidoj. Diligenta abelo flugas gaje zumante. La vilaĝa servisto atendas antaŭ la malfermita pordego de la garbejo, kiu estas kovrita per pajla tegmento. Li apogas sin sur sia falĉilo. Dekstre de li kuŝas la plugilo. La kato sidas proksime de la fojnforko, ludante. Certē ĝi baldaŭ ĉasos kaj kaptos la muson kaj raton.

【説明】 lago 湖、~eto 池。staras kun siajn hufoj en~ ……に蹄を浸して立つてゐる。re'freŝ'igi 再び新鮮にする、氣持を爽かにする。gaje 陽氣に。zumi ブンブン云ふ。estas kovr'ita per……で蔽はれた。apogi sin 凭れる。ĉasi 狩る。

中庭の後方には、田舎家が見えます、その瓦屋根の上には鴻が巢を造りました。両側には牛馬の厩と納屋とがあります。中庭の中央には瓶釣井戸があります。そしてその前には二三のバケツと秣槽があります。その左右には鳩屋が立つてゐます。村の女が鳩や七面鳥や牡鶏、牝鶏、雛鶏を呼び集めて、穀物を撒いてゐます。

前の方には池があります。鍔と手綱を付けた綺麗な馬が、家鴨親子が泳いでゐる爽やかな水に蹄を浸して立つてゐます。働き屋の蜜蜂が陽氣にブンブン云ふて飛んでゐます。村の下男が茅葺屋根で蔽はれた納屋の開かれた門口の前で、待つてゐます。彼は大鎌に身を凭せてゐます。彼の左方には鋤が置いてあります。猫が遊び乍ら秣扱の傍に坐つてゐます。きつとその猫は間もなく八日鼠と家鼠を追ひかけて捕へるでせう。

エスペラント中等講義

【La Patro】

Anton Ĉehov

Anton Ĉehov A. Ĉehov に就いては茲に喋々する迄もない。本月號から數回連載する“La Patro”は Ĉehov の第二期に見る哀愁の深い作品の一である。取材の廣さ、描寫の美しさ、纖細さ、的確さが了解され、すべての人物の上に注れた Ĉehov の美しい優情と貴い涙さが感受されよう。尙邦譯は秋庭俊彦氏の譯書により、之に多少加筆した。

—Mi estas ebria, mi tion konfesas... Pardonu, survoje mi eniris en drinkejon kaj trinkis pro la varmego du botelojn da biero. Varmege estas, filo!

Maljuna Musatov eltiris el la poŝo ĉifonon kaj viŝis sian razitan, ruĝe-bluan vizaĝon.

—Mi venis al vi, Borenka, anĝelo mia, nur por unu minuto, —daŭrigas li, ne rigardante la filon, —pro tre grava afero. Pardonu, eble mi malhelpas vin. Ĉu vi ne havas, mia animo, ĝis mardo d k rublojn? Hieraŭ mi devis pagi por la loĝejo kaj la meno... vi komprenas, eĉ se oni mortigus min!...

Juna Musatov silente eliris kaj post la pordo komencis murmureti kun la mastrino de l' somerloĝejo kaj kun la kolegoj, kiuj kun li komune ĝin luis. Post tri minutoj li revenis kaj silente donis al la patro dekrublan paperon.

【譯】「俺は白狀するが、一杯機嫌なんだ……許して呉れ。途中で居酒屋に入つて、あんまり暑いもんだからビールを二本飲んじまつたんだ。暑いなあ、忤！」

ムサートヴ老人は衣兜から襪襦布を取出して、剃つた赤味を帯びて青い顔を拭いた。

「大事な忤のボレンカ、俺はほんの一寸來たんだよ。」と彼は息子を見ずに續けた。「大事な用があつてな。邪覽だらうがまあ許して呉れ。なあお前、火曜日までだが十ルーブル

持合がないかな。昨日は間代を拂はなければならなかつたんだが、金と來たら……、お前も知つての通り、どうにもならないんだ！」

若いムサートヴは黙つて出て行つた。そして屏の向う側でこの貸家の女主人と彼がその家を共同で貸りてゐる同僚とにひそひそ聲で話し始めた。三分すると彼は戻つて來て、何も云はずに十ルーブル紙幣を父親に渡した。

【註】 ebria 酩酊せる。el'tiri 引張り出す。ĉifono 襪襦。raz'ita 剃られた。ruĝe-blua 赤味がかつて青い。anĝelo 天使、とは忤に對する愛稱、後に出て來る mia animo (私の靈)や mia koro (私の心臓)等はよく戀人の呼掛けに用ひられます。例：—Adiaŭ, Heleno! diris la princo: adiaŭ, mia koro, feliĉo de mia vivo! (Princo Serebrjanij p. 42) mal'helpi 妨げる。...ne havas ĝis mardo ...火曜日まで(貸して呉れる金を)持ち合せないか。eĉ se oni mortigus min! 假令俺を殺して見たつて(知つの通り金と來たら一文もない)。murmur'eti 囁く。somer'loĝejo 夏向の住居、と云ふと如何にも贅澤に聞えるが、こゝでは vilao の意味でなく寧ろ vilaĝa domo (country house)—Millidge. kolego 同僚。konune 共同に。

La maljunulo, ne rigardinte ĝin, malzorge ŝovis ĝin en la poŝon kaj diris:

—Merci. Kiel vi fartas? Jam de longe ni ne vidis unu la alian.

—Jes, de longe. De Pasko.

—Kvin fojojn mi intencis veni, sed neniam mi havis tempon. Jen unu afero, jen alia... tute neeble estis! C tere, mi mensogas... ĉion mi mensogis. Ne kredu, Borenka, al mi. Mi diris: mardo mi redonos al vi la dek rublojn; ankaŭ tion ne kredu. Kredu nenion mian vorton. Mi faras nenion... Maldiligenteco, drinkado kaj honto iri sur la strato en tia kostumo, jen estas ĉio... Pardonu al mi, Borenka. Mi

trifoje sendis al vi knabineton peti monon kaj mi skribis plendajn leterojn. Mi dankas vin pro la mono, sed ne kredu al la leteroj: mi mensogis. Mi hontas vin rabi, mia anĝelo; mi scias, ke vi havas apenaŭ sufiĉe por vi, ke vi mizere vin nutras, sed tia estas mia senhonteco, ke oni povus montradi min por mono!... Pardonu al mi, Borenka. Mi diris al vi puran veron, ĉar mi ne povas indiferece rigardi vian anĝelan vizaĝon...

【譯】老人は、それには目も呉れず、無雜作に衣兜の中へ突込んで言つた。「有難う。時に近頃はどうか？ 長らく會はなかつたなあ。」「え、久し振りですね、復活祭以來ですよ。」「俺は五度もお前のところへ來ようと思つたんだが、閑暇が無かつたんだ。あれや、これやと仕事が出て、どうしても來れなかつたんだ。だが俺は出鱈目を言つてゐるんだ、皆んな出鱈目ばかりだつた。俺の言ふ事なんぞ眞にうけるなよ、ポーレンカ。俺は火曜日に金を返すさ云つたが、それも信ずて呉れるなよ。俺の言ふ事なんぞ一言も信じないで呉れ。俺は何も仕事なんぞしてゐやしないんだ。怠けて、呑んだくれて、そして恥しい話だが、こんなものを着て往來を歩きまはつてゐるだけなんだ。だがまあ許してくれよ、ポーレンカ。俺は三度もお前のところへ金を借りて小娘を使ひに出したつてな、そして哀れつぽい手紙を書いたもんだ。あの金のお禮も言ふよ。だが手紙の文句なんぞ信じないで呉れ。みんな虚言だつたんだ。俺は大事な倅のお前から搾り取るのを恥じてゐる。お前がお前の使ふ分も碌すつぽ持たずに、みじめな食物を食つてゐる事は俺も知つてゐる。けれども俺は金の爲に晒者にされても平氣な程破廉恥漢なんだ。許して呉れ、ポーレンカ。俺はお前の優しい顔を平氣で見て居る事が出來なくなるので、本當の事を言つて了つたんだ。

【註】mal'zorge 氣兼ねしに、不注意に。ŝovi 押しやる。ŝovi en, enŝovi 押し入れる。Merci (佛)=dankon. de longe 長い前から。unu la alian=sin reciproke お互に。Pasko 復活祭。tute ne eble estis=veni estis tute ne eble. cefere それはそれとして。mensogi 嘘を言ふ。kredi al iu 何某の言ふ事を信用する。

re'doni 返す. honto iri sur la strato en tia kostumo 街をこんな恰好をして歩く恥。rabi 奪ふ。vi havas apenaŭ sufiĉe (da mono) 如何にかやつて行けるだけの金がある。sin nutri 自らを養ふ、生活する。tia, ke ...は...の程度だ。montr'adi min por la mono 金と引換に俺を(破廉恥漢の)標本に出来る位...。indiferent'e 無關心に。

Pasis minuto en silento. La maljunulo profunde ekĝemis kaj diris:

—Regalu min, mi petas, per glaso da biero...

La filo silente eliris, kaj ree eksonis murmureto post la pordo. Post momento oni alportis bieron, la maljunulo vidante la botelojn viviĝis kaj subite ŝanĝis la tonon.

Antaŭ kelkaj tagoj mi ĉeestis vetkurojn, —rakontis li, farante timajn okulojn. —Ni estis tri kaj ni vetis en la totalizatoro tri rubjon. Nia ĉavolo venis unua, ni ricevis po tridek tri rubloj. Mi ne povas vivi sen vetkuroj. Nobla plezuro! Mia maljunulino ĉiam riproĉas min pro la vetkuroj, sed mi iras. Mi amas ilin, faru kion vi volas!

【譯】少しの間沈黙が續いた。老人は深い溜息を吐き乍ら言つた。「所でビールを一杯飲まして呉れまいか。」息子は黙つて出て行つた。そして再び扉の向ふ側で囁き聲が聞えた。暫くするとビールが運ばれた。老人は壺を見ると、元氣がよくなつて急に調子が變つて來た。

「俺は五六日前に競馬に行つたよ。」と彼はキョトキョトした眼付をし乍ら話し出した。「仲間が三人あつてな、「計數器(トリス)」に三ルーブル賭けた。すると俺達の馬が一等になつて三十三ルーブル儲かつた。俺は競馬は止められないよ。あいつは上品な娛樂だ。俺の因業婆さんは競馬を聞くさ愚圖々々言ひ出すが、俺はそれでも出掛けるのさ。お前さんはお前さんの好きな事をしたがいいさ、俺はさにかくあれが好きなんだ。」

【註】regali 饗應する。viv'igi 活々する。tono 調子。vet'kuro 賭け競争、必ずしも競馬とは限らないが、他の kuro に賭けをする事先づなからうから、大抵の場合には「競馬」と解して差支へない。tima オドオドした。totalizatoro 計數器。venis (estante la) unua 第一等になつて來た。riproĉi 咎める。

Disvolviĝo de Esperanto kaj Esperantologio

【normo ㇿ fakto】

川崎直一

Esperanto 發達の時代わけ

- I. 1887 年 Unua libro の發表
- II. ↓
- III. 1905 年 Fundamento の承認
- IV. ↓

I. Unua libro

Unua libro のことを論するにわ、もちろんほんさうの Unua libro すなわち ロシヤ語で書かれたものをさりあつかうべきであるが、はなはだ残念なことにわ私わロシヤ語が讀めないのでフランス語で書かれた Unua libro をさりあつかうこととする。けれどもいろいろの Esperanto 歴史を書いた書物をみても、フランス語で書いたものも、ロシヤ語で書いたものもその内容が同じであるさゆうから、今日わこれでやつていくことにします。それからこの Unua libro さゆうのわ通稱で、正しい題のエスペラント譯わ D-ro Esperanto. Internacia Lingvo. Antaŭparolo kaj Plena Lernolibro [por Rusoj] (Privat, Historio de Esperanto I による)であつた。そしてこの書の内容わ Antaŭparolo; alfabeto de la lingvo Internacia; dek ses gramatikaj kaj sintaksaj reguloj; kelkaj Esperantaj Tekstoj: *Patro nia*, *El Biblio*, *Modelo de letero*, *Poemo "Mia Penso"*, *traduko el Heine*, *Poemo "Ho mia kor"*; vortaro internacia-nacia enhavanta 918 radikojn (以上 Privat, Historio de Esperanto I による)。

すなわちこの書に Deviga normo ㇿしてはつきりした形で示されているものわ Alfabeto ㇿその發音、16 ケ條の文法、918 の語根である。又この書の他の部分の文章から歸納される normo が成立し得る。これわもちろん Alfabeto ㇿその發音、16 ケ條の文法、918 の radikoj さゆうようなすでに十分成立したそしてはつきりした形で示された normo すなわち deviga normo でわないけれども、Unua libro さゆう唯一のそして重大な著述中の fakto から歸納された法則であるからして、たさえ撰擇ㇿ批評の自由を有するさわいえ rekomendinda normo ㇿして尊敬されたのである。さくべつに反對する理由のないかぎり従わべき normo であつたのである。例えば: ni amas sin のごさき用法わ 16 ケ條の文法それ自身にわ書いてないが、この書中

の種々の literaturo よりこの用法を歸納することができる。

(それからちよつㇿ注意しておきたいことわ Esperanto ㇿいさごも 1887 年の Unua libro によつて突如ㇿして世にあらわれたものでわない。Esperanto わ Indo-Eŭropaj lingvoj の繼續ㇿもみるこゝができるし、また Zamenhof 自身もこの Esperanto を發表するまでわすいぶんながくかかつたのである、この邊のこゝさ Unua libro 中の Deviga normo, Rekomendinda normo ㇿの關係わ別に研究を要するのであるが、今晚わこれにわふれないこととする)。

I. Unua libro 1887 年

Deviga normo.....

文字ㇿその發音。16 ケ條の文法。表におさめられた 918 の語根。..... U

Rekomendinda normo.....

例: Ni amas sin u

—○—

II. Unua libro→Fundamento

かくて Esperantistoj わ(もちろん Zamenhof をふくめて)この Unua libro をもささして、すなわちそのうちの deviga normo ㇿ rekomendinda normo をもささして、翻譯し、創作し、會話して Esperanto を育てていつた。すなわち literaturo さゆう fakto がだんだん増えてきた。そしてこの fakto から歸納され得る normo もだんだん多くなつてくる。しかしこの normo の價值わ、Unua libro 中の rekomendinda normo ㇿわ同じでわない。Unua libro が非常に重大なものであつたから、そのうちの rekomendinda normo も非常に尊重されたもの、言いかえれば、Unua libro 中の literaturo から歸納された normo であるから rekomendinda ㇿなつたのであるが、Unua libro 以後にあらわれた literaturo わもちろん Unua libro にくらべるㇿその尊重される程度が低い。ゆゑにこれらから歸納されてできた normo わ Unua libro 中の rekomendinda normo よりわその價值が低くなるのわ當然である。まづかりに Atentinda normo ㇿ名すけておこう。

II. Unua libro → Fundamento

1887 年 → 1905 年

Deviga normo.....	
U 中の變らずに残つたもの	U'
[参考: U 中の滅びたもの。]	
例: korono	U''
Rekomendinda normo	
u 中の變らずに残つたもの。	
例: Dio	u'
[参考: u 中の滅びたもの。]	
例: ni amas sin	u''
Atentinda normo.....	
Unua libro 以後にあらわれた諸 種の文獻より歸納されたもの...	1
[参考: 後まで残つたもの。]	
例: kago	1'
[すぐ滅びたもの。]	
例: garo	1''

—○—

III. Fundamento

1805 年 Zamenhof わこの Unua libro の normo さそれ以後の言語の展開によつて生じた normo さを整理して Fundamento de Esperanto をあらわした。すなわちこれがこの年における Esperanto の normo の總計である。この書の内容は誰でも知つてゐる通り (1) Antaŭparolo, (2) 16-regula Gramatiko, (3) Ekzercaro, (4) Universala Vortaro である。(2) わ Unua libro に同じく、(3) さ (4) わすでに 1905 年以前に出版された)。そして 1905 年ブーロニユの第 1 回萬國エスペラント大會がこの書をすべての Esperantistoj のかならずまもるべきものと宣言した。

III. Fundamento 1905 年

Deviga normo.....	
文字のその發音。16ヶ條文法。	
Universala Vortaro	U' + I' = F
Rekomendinda normo.....	
Ekzercaro Antaŭparolo...	u' + I' = f

—○—

IV. Fundamento → hodiaŭ

1905 年に Lingva Komitato が成立したので、この Komitato の oficiala decido わ deviga normo さなつた。

IV. Fundamento → hodiaŭ

1905 年 → hodiaŭ

Deviga normo	
.....	F

oficialaj decidoj de Lingva

Komitato O

Rekomendinda normo

..... f

oficialaj decidoj de Akademio

Lingvaj Respondoj de

Zamenhof

decidoj de Esperanto-Kon-

greso

decidoj de Esperanto-Insti-

tucio

Atentinda normo 諸種の文獻より歸
納されたもの

以上わ Esperanto の Disvolviĝo だけしか述べなかつたのであるが、Esperantologio のほうわ他日の機會、例えば今後の日本エスペラント大會の Esperantologa Kunveno のおりにでも述べることにして、今晚わこれだけで御免をこうむることにします。

九月號正誤

p. 265 右欄 20 行から 28 行迄次の如く説明を補う。

Evolu' が第 2 回 Aldono のとき、Evoluci' が第 3 回 Aldono のとき採用されたのであるから、oficiala Aldono としてわ Evolu' のほうが Evoluci' より古い、しかし一般にわ Evolucio—Evolucii が古くから行われ、近來 evolui—evoluo が盛んになつたのである。ごく最近の Heroldo de Esperanto 誌上にあらわれた Naŭlingva Etimologia Leksikono の紹介文にも『以前わこの書の序文にある ごさく cio evolucas さいつたが、いまでわ cio evoluas さいう』(原文の大意) さある。

	誤	正
p. 266 左 l. 27	lob-o*	} * わ不要
	medol-o*	
p. 266 左 l. -9	同上	同上
p. 266 左 l. -8	orbit-o*	* わ不要
p. 266 右 l. 16	Cevrono	Ĉevron-o
p. 266 右 l. 24	ŝpato*	* 不要
p. 266 右 l. -3	orbit-o*	* 不要
p. 266 右 l. -6	perreĝo	porreĝo
p. 267 左 l. 10	Redukt-i	* 不要
p. 267 右 l. 29	valnto	valuto

九月號 附 録 會員名簿正誤

p. 28 (新撰エス和辭典附録中)

ŝpat-o の譯語 [スベード](カノ) は

[スベ(西洋鋤)] さ訂正

Z 博士の手紙より

[最新刊 Originala Verkaro について]

岡 本 好 実

Esperanto-Instituto por la Germana Respubliko の direktoro であり我が Esperantista Akademio の Vicprezidanto の要職にある D-ro Joh. Dietterle が先年來 Zamenhof 博士の手紙類を蒐集してゐる事は Heroldo その他の雑誌でみて誰しも知つてゐる事だがその後それらの材料を整理して Z 博士のすべての originalaj verkoj の集大成として “Originala Verkaro” の名の下に豫約出版の事に關し本年初頭發表があつた事も同志諸君の御記憶の事と思ふ。

去る九月初旬まにまつたこの書が學會へ到着した。その titolo は “L. L. Zamenhof. Originala Verkaro. Antaŭparoloj—Gazetartikoloj—Traktaĵoj—Paroladoj—Leteroj—Poemoj. Kolektitaj kaj ordigitaj de D-ro Joh. Dietterle” といふ。獨逸ライプツヒ市のお馴染の Hirt & Sohn 書店發行のものである。菊版 605 頁の大冊で上等の黒色クロースに金文字を入れた美麗優雅な装幀。外にザメンホフ博士の肖像一個と附録として La Esperantisto 誌第一號の見本一葉が凸版で實物大のまゝで翻刻したものを貼付した氣のきいた本である。大枚 15 マルクでは一寸手が出し難いがエスペランティスト必携の良書である。

本書はその titolo の示す如く Z 博士のあらゆる originalaj verkoj を包擁するもので六部に分たれ第一部 Antaŭparoloj は “Unua Libro,” “Dua Libro” 其他の Z 博士の著作中の antaŭparoloj をすべて網羅した。第二部 Gazetartikoloj は Z 博士が “La Esperantisto” 其他の雑誌へ發表したあらゆる artikoloj を収めてゐる。但しその中で “La Esperantisto” にのせた Esperanto の reformo に對する Z 博士の artikoloj だけは Z 博士の生前の意志を尊重して省略し又 Lingvaj Respondoj は既に別の書籍となつて發表されてゐるもの故これは省略してゐる。第三部 Traktaĵoj は “La Esperantisto” にでた “Esperanto kaj Volapük” と云ふ artikolo と “Fundamenta Krestomatio” にでゝある “Esenco kaj Estonteco de la Ideo de Lingvo Internacia” との外に Homaranismo 其他 Z 博士の politikaj opinioj をふくんだものを収

めた。第四部 Paroladoj は萬國大會その他の演説を収め第五部 Leteroj は Z 博士が各地の同志と交換した書信三百七十餘通が収められてゐる。第六部 Poemoj は originalaj poemoj たる “La Espero,” “La Vojo,” “Al la Fratoj,” “Mia Penso,” “Ho, mia kor’,” “Preĝo sub la verda standardo,” “Al la Esperantisto’,” “Saluto al ‘Verda Radio’,” “Pluvo” の八篇を収めてゐる。

我々はこの彪大にして貴重な材料を提供された Dietterle 博士に満腔の感謝を表明するものである。D 博士の努力によつてこゝに集大成された Z 博士の originalaj verkoj は今後我々の研究に寄與する點は蓋し多大のものであらう。

既に世界のいづれをたづねても殆んど手に入る事のできぬ貴重な雑誌その他の書籍から材料をあつめられた本書は實に我々エスペランティストの聖典としてエスペラントの永續する限り萬代の後まで貴ばれる事であらう。

私は同書を通讀した時特に第五部 Leteroj の部をよんで氣付いた所のものを noto に書きさめてをいたものを紹介してみたいと思ふ。勿論ほんの通讀の際の心おぼえ故（熟讀玩味すればまだ澤山の材料を得る事であらうが）材料も十分でないが種々興味の深い點について順序をおはす氣づいた儘にのべてみようと思ふ。

1. Realisto Zamenhof

Zamenhof 博士は實に偉大な idealisto である。我々はその天才の idealo から生れてた ideala lingvo たる Esperanto のため働くものである。併し私は Zamenhof 博士が單なる idealist でなく着實に現實をいふ事を忘れなかつた點に Esperanto の成功の一端がありはしないかと思ふ。Esperanto が他の五百有餘の國際語の中で一人ぬきんでて實用化されてきた所以のものは一面 Z 博士の人格のしからしむる所であるが他面にはこの現實を忘れなかつた Z 博士の行動も多きな faktoro となつてゐると思ふ。免角 idealisto は現實を無視する人が多いが現實を無視してどうして idealo が實現させられようか。それではただ revo にすぎないものだ。

Zamenhof 博士は生れるときから貧乏なやつてきた。大學はごうにかおへたが醫者を開業早々から貧乏で貧乏で苦しみぬいた事はエスペラント史の一端をひもこく者のたれしも氣づく事である。殊にエスペラント發表後から 1900 年頃迄の間の窮乏は想像以上である事はその時代に方々へだした手紙中にもその片鱗がうかがはれる。又 “La Esperantisto” 誌上の artikoloj の中にも十分認められる所である。その窮乏のドン底にあつてもこの理想をすてすこの現實に即して働けるだけ働くといふ努力はやめなかつた様であるそれが Esperanto をして今日の盛大をもちきたらしめるに相當の力をなしてゐる事は云ふまでもない。Z 博士が各地の同志にだした手紙をみるに何冊何割引の何 rubloj 何 kopekoj その送料が如何程それで貴下の ŝuldo は合計何程さか書いた手紙がかなり澤山残つてゐるのにみても一冊の本の代價も一冊の本の送料もゆるがせにせずして几帳面に丹念に記入してゐた事が判る。唯 Z 博士は轉々の方々へ移轉したため既に今日存在しないだろうと思はれるがさにかくエス語の初期の時代主として Z 博士の手によつてエス書が出版されてゐた時には博士の手許には二三冊の出納簿や金の貸借の臺帳が置いてあつて博士自身克明に記入してゐたろうと想像される。Idealisto なる博士の半面にかゝる realisteco をみさめる我々は眞の idealo に忠實なる人間のなすべき大道を示してくれてゐる事を考へる。

次に掲げた Zamenhof 博士の手紙の中にエス運動には『金錢』は大きな役割をなすといふてゐるのもその Z 博士の一端を表はすものである。Esp. Akademio がはかばかしい仕事のできないのも U. E. A. の活動も我が學會の仕事ももさづく所結局このもの(mono?)がゆたかでない許りです。勿論この mono だけで人手がなくても困るが。

1.

Al s-ro M. en S. Peterburg.—Via energia laborado estas tre laŭdinda; sed via faremeco estus multe pli utila por nia afero, se vi uzus ĝin en alia maniero. Anstataŭ la personoj, kiujn vi gajnis por nia afero kaj kiuj nenion faras, estus pli utile se vi povus gajni unu aŭ kelkajn **riĉulojn**, kiuj volus ion *fari* por nia afero. La plej bedaŭrinda fakto en nia afero estas tiu, ke ni ne havas ankoraŭ inter niaj

amikoj eĉ unu riĉulon, kiu povus kaj volus ĝin subteni. En nia tempo sen rimedoj materialaj ĉia afero pavas progresi nur tre malrapide, kaj ĉiu paŝo kostas doloron kaj suferon. (Respondoj al la amikoj “La Esperantisto,” 1890; O. V. II. 11)

2.

La plej malforta flanko de nia afero estas tio, ke ĝis nun ni ne havas, ankoraŭ eĉ nnu **riĉan homon**, kiu povus subteni nian aferon materiale. La tuta nia afero ĝis nun kuŝas sur la ŝultroj de personoj, kiuj havas bonan volon sed ligitajn manojn kaj neniujn rimedojn. Dume nia afero, por progresadi rapide, postulas grandajn rimedojn. Oni devus dissendi en la mondon grandan nombron da lernolibroj kaj agitantaj broŝuroj, oni devus donadi anoncojn, eldonadi verkojn k.c. Estas sendube, ke se ni havus materialajn rimedojn, nia afero irus cent fojojn pli rapide. Tial ni petas niajn amikojn peni, kiom ili nur povas, altiri **riĉulojn** al nia afero. Ankaŭ homoj kun konataj nomoj aŭ okupantajn gravajn situacion en la societo estas por nia afero tre gravaj; kvankam jam nun inter la amikoj de nia afero trovas sin kelkaj personoj tre altaj kaj influaj sed, pro kaŭzoj ne kompreneblaj al ni, ili bedaŭrinde sin ĝenas ankoraŭ ne sole fari ion publike por nia afero, sed eĉ elmeti malkaŝe sian nomon. La plej grandan utilon al nia afero alportos tiu, kiu inkliniĝos por ĝi iun riĉulon, kiu volus preni sur sin la tutan materialan flankon de nia afero. (Artikoloj, “La Esperantisto,” 1891; O. V. II. 38)

3.

.....Mi ne scias, kiaj estas viaj planoj por la estonteco, sed mi pensas ke antaŭ ĉio vi devas per ĉiuj fortoj peni fondi solidan *kason*, ĉar por sukcesoj en nia afero, tiel same kiel por milito, “estas necesaj tri objektoj: **mono, mono, kaj mono.**”

Al vi kaj al ĉiuj estimataj membroj de la “Espero” koran saluton...

(Al la prezidanto de esp. societo “Espero” en St. Peterburgo, 23/IV/1892; O.V.V. 141)

[以下頁 296 へつゞく]

Elementa Kurso por la Studo Sciencia

伊藤徳之助

1. KEMIA EKSPERIMENTO.

1. Mi prenas flakonon.⁽¹⁾
2. La flakono enhavas kemian⁽²⁾ substancon.
3. Mi faras eksperimenton.
4. Mi versâs la substancon kemian en balonon.⁽³⁾
5. Mi frotas alumeton kaj bruligas bekon de Bunsen.⁽⁴⁾
6. Mi metas tripiedon sur la bekon de Bunsen.
7. Sur la tripiedo,⁽⁵⁾ mi metas metalan reton, kaj sur la metala reto mi surlokas retorton.
8. La flamo varmigas la retorton kaj la likvaĵon de la retorto.
9. La likvaĵo varmiĝas, kaj atingas sian bolpunkton.⁽⁶⁾
10. Ĝi komencas boli, ĝi eniras en boladon.
11. Kiam la likvaĵo bolas, ĝi vaporigâs.
12. La vaporo plenigas la retorton.
13. La vaporo eniras en kondensilon.⁽⁷⁾
14. La vaporo kondensiĝas en likvaĵon.
15. La likvaĵo falas sur la fundon de flakono.
16. Kiam mi havas sufiĉe da likvaĵo, mi estingas la bekon de Bunsen.
17. Mi versâs la likvaĵon en alian flakonon.
18. Mi aldonas acidon al la likvaĵo.
19. La acido malkombinas⁽⁸⁾ la likvaĵon.
20. Mi aldonas reakciilon.⁽⁹⁾
21. La reakciilo produktas precipitaĵon.⁽¹⁰⁾
22. Se la reakciilo ne produktas precipitaĵon, mi provas alian reakciilon.
23. La precipitaĵo min helpas trovi la konstituon⁽¹¹⁾ de la kemia substanco.

[註] (1) フラスコ(細口罎) (2) ĥemia, 化學的 (3) フラスコ(球狀) (4) ブンゼン
燈, flamingo (5) 三脚臺 (6) 沸騰點 (7) 凝結器 (8) 分解する (9) 試
藥: reakcio 反應 (10) 沈澱物, = precipitato (11) 組成, kompozicio

Demandoj

Kion vi prenas? Kion enhavas la flakono? Kion vi faras? En kion vi versâs la substancon? Kion vi bruligas? Kion vi metas sur la flamingon de Bunsen? Kion vi metas sur la tripiedon? Kion vi lokas sur la metalreton? Kion varmigas la flamo? Kiel fariĝas la likvaĵo? Ĉu la likvaĵo bolas? Kien iras la vaporo? Kiel fariĝas la vaporo? Kien falas la likvaĵo? Ĉu vi vaporigas ĉiom da likvaĵo? En kion vi versâs la likvaĵon? Kion vi aldonas al la likvaĵo? Kiel estas la ago aŭ efiko de la acido? Kion vi aldonas tiam? Kion produktas la reakciilo? Al kio helpas vin la reakciilo?

Internacia Teknika Kongreso kaj Esperanto

(raporto de la iniciatoraro)

La legantaro eble memoras laŭ la maja numero de la Revuo Orienta, ke ni prezentis proponojn al la I.T.K. okazonta venontan oktobron en Tokio, ke la oficiala lingvo de la kongreso estu Esperanto estonte, k.t.p. . . .

Al tiuj proponoj respondis Barono D-ro Ŝiba en nomo de la vicprezidanto, ke li bedaŭras malakcepti la proponojn, ĉar unue jam estis aldifinitaj japana kaj angla kiel la oficialaj lingvoj por ĉifoja kongreso, kaj due ke la kongreso ne estas daŭra, nur haza da.

Sed tiu ĉi respondo ne indas malkuraĝigi nin ni do iom ŝanĝis la planon kaj denove prezentis petoskribon kun subskriboj de

D-ro N. Inoue, rektoro de Toohoku Imperia Universitato,

D-ro O. Mijagi, prof. de Toohoku Imperia Universitato,

K. Takahaŝi, del. UEA, civila inĝ.,

T. Minoda, direktoro de J E I, civila inĝ.,

D-ro G. Kita, prof. de Kioto Imperia Universitato,

D-ro B. Arakaŭa, prof. de Kiuŝu Imperia Universitato,

D-ro K. Jamamoto, vicadmiralo, marmilita inĝ.,

K. Oŝaka, direktoro de J E I, forvoja inĝ.

Jen la resumo de la petoskribo:

1) Al la traktatoj kaj raportoj publikigitaj aldonu Esperantan tradukon. Se tio estas neebla, esperantigu la tuton aŭ resumon de kelkaj laŭ deziro de la aŭtoroj. Ni Esperantistoj povus preni sur nin la taskon de tradukado, kondiĉe ke la elspezojn por tio pagu la kongreso. .

. . . . La esenco de Esperanto estas, ke la verkinto povas publikigi sian verkaĵon tute senĝene koncerne la gramatikon kaj frazeologion. . . . La traktatoj Esperantaj jam publikigitaj de japanoj estas 22 en medicina fako, 16 en scienca, po 1 en leĝa kaj inĝeniera, entute 40. . . . La gvidlibro "Japanlando" eldonita de la Fervoja Departemento sufiĉe plenumis sian rolon en la senco de "internacia", ne kiel tiu en iu aŭ alia nacilingvo, kies influfero estas limigita. . . . Sed la plej grava estas la neŭtraleco de la lingvo, dank'al kiu ĉiuj popoloj povas interrili sin reciproke je egala oportuneco, kio helpas grandmezure al la disvolviĝo de la monda kulturo. . . . Tradukante traktatojn ni povus plejparte elpensi justan sinonimon de la teknika terminaro, sed se ne, ni povas peti la konsilon de la "Esperantista Akademio" en Parizo.

2) En estontaj kongresoj tiuspecaj donu al Esperanto tiel saman privilegion kiel al la nacilingvo de la lando, kie oni prezidas la kongreson. Oni donu al ni taŭgan okazon dum ĉifoja kongreso, por ke ni povu esprimi la supremenciitan opinion al la tuta partoprenantaro. k.t.p., k.t.p.

La petoskribo estis prezentita la 9an de Septembro al la estraro de la I.T.K. ĉe Kogjo Klubo, Marunoŭĉi, Tokio.

Koncerne tiun ĉi entreprenon ni dissendis alvokon al 22 Esperantaj redaktoj tra la mondo, kaj kiel ĝia resonado ni ricevis aprobojn, instigojn kaj eĉ helpon de ĉisubaj samideanoj, al kiuj ĉiuj ni esprimas nian tutkoran dankon, dezirante, ke ni sukcesu almenaŭ iugrade por rekompenci al ilia simpatio: (daŭrigota al la p. 296)

宇都宮正

れておかねばならない。而 M. T. も N. T. も Judoj の書いたものである。

3. Bedelio

日本語の M. T. にはブドラクと譯され、英語では Bdellium となつて居る。M. T. にたゞ二回だけ使用せられて居るのみである。恐らく他の書物には見出されないであらう。この vorto が何であるかは學者の間にも色々な説があつて斷定する事は出来ないが多分 Dro Peake の言ふ如く bonodora gumo であらう。

“Kaj la oro de tiu lando estas bona; tie troviĝas bedelio kaj la ŝtono onikso.”

(Genezo 2₁₂)

“Kaj la manao estis kiel semo de koriandro, kaj ĝia aspekto estis kiel la aspekto de bedelio.”

(Nombroj 11₇)

4. $\text{dua} = \text{alia}$

Kompreneble 'dua' ne estas Biblia vorto, sed pro tio ke en la Biblio mi vidis tre ofte interesan uzadon de l' vorto, mi volas ĝin iom prinoti.

La vorto 'dua' havas sencon: Estanta en la ordo kiu sekvas la unuan; kaj 'alia' sencon: Ne sama kun tiu jam menciita. Do estas klare ke sin trovas distingita diferenco de senco inter 'dua' kaj 'alia'. Sed kiam oni priparolas pri *du* personoj aŭ aferoj oni uzas la vorton 'dua' en la senco de 'alia'. Kaj en tia okazo la vorto 'unu' estas ĉiam uzata kune kun la vorto 'dua'. Tiam uzadon de l' vorto Dro Zamenhof faris tre multe en M. T. Jen ekzemploj.

“Kaj Lemeh prenis al si *du* edzinojn: *unu* havis la nomon Ada, kaj *la dua* havis la nomon Cila”. (Genezo 4¹⁹)

“Tiam la anĝelo de la Eternulo starigis sur la vojeto inter vinbergardenoj, kie estis barilo sur *unu* flanko kaj barilo sur *la dua* flanko”. (Nombroj 22²⁴)

“Kaj la Eternulo sendis al David Natanon, kaj ĉi tiu venis al li, kaj diris al li: En unu urbo estis *du* viroj, *unu* riĉulo kaj *la dua* malriĉulo;” (II Samuel 12 1)

“Ĉar per la faroj de la *leĝo* neniuj karno
pravigos antaŭ Li; ĉar per la *leĝo* venas
konscio pri peko.” Romanoj 3₂₀.

然し Biblio の legantoj は、Judoj の知つて居た道德律は大體に於いて Pentateŭko にしるされて居る所のものであつた事を頭に入

質 疑 應 答

★外國から來た手紙に Nov-Esperanto なる語がありましたが如何なるものですか（京都府、清水氏）。

[答] 1925 年に發表した Rene de Saussure 氏の國際語です。同氏は 1907 年 Ido が現はるゝやその根本的に誤れることを指摘し、自ら Antido と云ふ匿名で新語（大體 Esperanto と同じ）を發表。1910 年には Antido の不備の點を訂正して新語 Antido No. 2 を發表。更に 1912 年には Lingvo Kosmopolita を發表、雜誌も出したが氣に入らず翌 1913 年に又々訂正して Lingvo Cosmopolita を發表。更に研究の結果矢張り Esperanto が一番理論的だと云ふので Esperanto に復歸、Esp. の理論的な造語法々則を論じた Vortteorio (1914)、次でそれを訂正した Vort-Strukturo (1916) を發表、これは Esp. のため大なる貢獻であつたが、1919 年には又々脱線して新語 Esperantida を發表、教科書等數書を發行、然しそれも屢々にしてあきが來て Esp. の要素を多分に取り入れ（例へば ĝ の如き supersignita litero を採用するなど）Esperanto evoluinta en la direkto al Esperantida（實は Esperantida evoluinta en la direkto al Esperanto!）を發表、更にそれも思はしくないので 1925 年に發表したのが Nov-Esperanto です。同氏は元 Geneve 大學の數學の教授でしたが今 Wien に引込んでゐます。妻君運の悪い人で三人の妻君に死なれたがその代り三度共妻君が澤山の持參金を残して歿したので、それが資金でかくは澤山の國際語を發表出來たのだと云ふことです。氏はエスペラント學士院文法部長でしたが、こう云ふ有様などで Esp. 界前代未聞の學士院除名處分を受けました。なほ同語は今後如何に變更されるかわかりませんし馬鹿々々しい次第ですから茲には語に就ての紹介はいたしません。なほ各種國際語の詳細な年表は今回故松崎氏の『愛の人ザメンホフ』再版に當り附録に増補して附けました（約五百餘種の國際語あり）。

★エス中等讀本 p. 9 下記の文の解釋を。尙 ja, je, do, mondo の用法を（兵庫縣、中野氏）。

— Ĉu vi estas kontenta je via nova bofilo?

— Ho, ne forte, mi faris tre malbonan elekton.

— Per kio?

— Vidu, mia kara, li ne povas trinki, li ne

scias ludi kartojn, kaj al ĉio li havas ankoraŭ mirindan talenton de parolado.

— Kion do vi volas? mi vin ne komprenas! Tio ĉi estas ja ĉiuj nur tre bonaj ecoj!

— Sed vidu: li ne povas trinki kaj trinkas, li ne scias ludi kartojn kaj ludas; se li ne estus granda parolanto, tiam mi sola scius, ke li estas malsaga, — nun la tuta mondo tion ĉi scias.

[答] Je は適當な前置詞がないと思はれる場合に假用する前置詞たることは御承知のことと思ひますが、かゝる場合強いて求めれば多く何か前置詞はあるものです。Esp. の形のきまらなかつた初期時代には當然 je が濫用される傾向がありましたが今日では自然範圍が狭まり又場合がきめられるに至りました（例へば年次は en, 日附は目的格, 時刻は je: je la dua (hor) kaj duono posttagmeze la 3-an (tagon) de Septembro en la jaro 1929-a)。上記の例なども kontenta pri と云へます。

Ja は言勢を強める語で『それこそ、まつたく、…ぢやないか(などの意)』Li ja diras la veron. 『成ほど矢張り彼の云ふことはほんただわい』Do は前のつゞきを受けて『そんなら(一體), 依て』Mi do eraris『してみると僕の間違だ』。

mondo (1) 世界, 世の中, 世間 (2) (それより世間中の世間と云ふ意で) 上流社會。

『今度のお嬢さんはお氣に召しましたか』

『いや、あんまり感心しませんよ、めがれちがひを致しました』

『どう云ふ點がですれ』

『まア御覽なさい、あなた (mia kara)、先生 (酒が) 飲めない、花の引き方を知らぬ (トランプをする = バクチをする)、そしておまけに (al ĉio……ankoraŭ) 驚くべき辯舌の才能がありますのでな』

『何とおつしやる(と云ふのは全體(do)何を云はうと云ふおつもりで volas=volas diri)? わかりませんかア。それや (ほんとは ja) 皆よい性質ばかりぢやありませんか』

『處がね (御覽なさい): 奴飲めもせぬ癖に飲む、花の引き方も知らぬのに打つ、若し奴が辯舌屋でなかつたら、奴が馬鹿だつてことを知つてゐるのは私だけですむのに、今ぢや世間中で知つてますよ』。

Policestro Bonanima

[Unuakta Komedio laŭ la originalo de George Courtrine]

[Prezentita de Nov-araneo-Trupo Esperantista okaze
de la 17-a Kongreso de Japanaj Esperantistoj.]

— Personoj —

Policestro	(Sro S. Iŭata)
Viro	(Sro J. Onoda)
Ragurnajo (Policano)	(Sro K. Ito)
Punezo („)	(Sro I. Jamamoto)
S-ino Froŝo	(S-ino A. Okamoto)
Burroko	(Sro M. Kidosaki)
Froŝo	(Sro K. Macumoto.)

Sceno: Ĉambro de la policestro. Dekstre fenestro. Maldekstre pordeto, kiu kondukas al kabineto por bruligaĵo. Ĉe la fundo de la scenejo pordo, kiu malfermiĝas ambaŭ flanken. Iom maldekstre de la pordo staras brulanta forno.

Policestro. (sidante ĉe skribtablo)

Je Dio, Mi malpermesas! Mi ja ne povas okupi min nur per via afero.

Viro. Sed, permesu min kunporti almenaŭ pistolon, mi petegas.

P.e. Absolute ne!

V. Kial ne! Tio estas negrava afero, ĉu ne?

P.e. “Kial ne?” Ĉar estas nepermeseble.

V. Aŭskultu, estro! Ĉirkaŭ mia domo estas terure danĝere. Kanajloj ofte ĉie ekaperas. Ili sin reciproke interbatalas la tutan nokton; se ne, sin ĵetas por rabi sur preterpasantojn. Cetere, mi mem volenevole devas reveni tre malfrue pro mia nuna okupo.

P.e. Vi do ŝanĝu vian okupon!

V. Bonega konsilo! Ĉu vi do bonvolus serĉi por mi iun alian okupon?

P.e. Lasu vian ŝercon! Ĉu vi efektive prenas la policejon por informejo de okupoj?

V. Se tamen en tiu ĉi nokto oni min atakos, kion vi ja povas fari, estro?

P.e. Ha! Informu morgaŭ matene.

V. Kaj tiam?

P.e. ...kaj tiam ... kaj tiam ... mi permesos al vi kunporti pistolon.

V. Vi do signifas, ke vi tion permesas nur post mia pafmortiĝo?

P.e. Certe.

Viro: Mi dankas.

P.e.: Nu jam sufiĉas. Mi nur agas laŭ la ordono de la registaro por efektivigi la regulojn; tio estas mia devo. Sed ne estas mia devo disuti kun iu permesi aŭ nepermesi. Se vi estas malkontenta je la nuna sistemo, vi mem ĝin rekonstruu!

V. Ho, ĉu mi ĝin faru?

P.e. He! Kion? Kion vi ankoraŭ parolacĉas? Kuraĝu paroli, mi tuj vin arestos... Kia surpriza fripono! Estas ja tro maldece, ke li enportu revolucionan tumultadon en la policoficejon! Vi tamen estas feliĉa, ĉar mi estas bonanima ...

V. Sed mi tre ...

P.e. Sufiĉe, sufiĉe! Foriru senhezite, mi petas. Alie vi tuj vidos, kiel potenco estas mia brako. Nu, for!!! for!!!

(La viro forkuras konsternite.)

P.e. Tiu anarkistaĉo estu sub mia suspekto!

(La policestro denove sidiĝas kiel ĉe la levigo de l' kurteno kaj alŝovas al si korbon, en kiu troviĝas amaso da novaj dokumentoj. Li rapide ilin trafolumas kaj jam komprenas, kion enhavas la prezentitaj dokumentoj. Poste fariĝas iom incitita. Sonorigas. Aperas policano.)

P.e. Alvoku S-ron Punezon al mi.

(*La policano malaperas kaj anstataŭe aperas Punezo—*)

P.e. Bonan matenon, Sro Punezo. Via servo estas tute senutila, kvazaŭ de porko. Se vi restos plu tiel sentaŭza, bedaŭrinde mi devas forpeli vin aŭ vin transloki. Kiel ofte mi ripetis, Sro Punezo, ke vi ĉiumatene aranĝu dokumentojn antaŭ mia alveno, por ke mia laboro fariĝu pli simpla! Se vi diligente plenumus vian devon, mi povus ŝpari mian karan tempon kaj mia kapo trovus iom da ripoza tempo. Jen kia malordo!!! Mi ja vane vin ordonas! Nu aŭskultu! Mi la lastan fojon al vi rimarkigas. Bone memoru! Vi jam povas foriri, Punezo.

Punezo:—(*Bonkore ridetante*) Mia nomo. estante hispana, elparoliĝas "Puniezo."
(*Foriras humile riverencante.*)

P.e. (*Revenas al sia antaŭa laboro; baldaŭ poste resonoriĝas. Aperas la antaŭa policano*) Alvoku la sekvantan!

(*Starigante*) Forno malbone funkcias!

Kvazaŭ en Siberio...en tiu ĉi ĉambro!

(*El kabineto elportas plenŝovelilon da ŝtonkarboj kaj enĝetas ilin en la kamenon, kiam virino ekaperas.*)

Virino:—Ĉu Sinjoro Policestro estas?

P.e. (*Tenante ŝovelien en la mano*) Jen mi estas.

V-ino:—Mi volus peti vian aŭskultadon pri mia plendo...

P.e. Ĉu pri via edzo?

V-ino:—Jes, kiel vi pensas.

P.e.—Ha, mi ĝuste trafis vian plendon, ĉu ne? Sed bedaŭrinde tia afero, estas tute ekster mia devo.

Vino:—Sed...

(*Si alŝovas al si seĝon kaj estas sidiĝonta.*)

P.e.—Oh! Bonvolu ne sidiĝi, sinjorino. Vi certe ne necesas sidiĝi, ĉar tio kaŭzus al ni tro longan interbabilon. Estas, vere tre strange; preskaŭ ĉiuj virinoj kredas ke la policestro estas repaciganto de intergeedza malpaciĝo. Nu, sinjorino, vi devas bone sciigi, ke tia bagatela hejma malpaciĝo estu tute ekster mia aŭtoritato!

Vino:—Sed...

P.e.—Ŝparu superflujajn vortojn, mi petas. Ĉu do via edzo trompis vin?

V-ino:—Ne, mia edzo ne trompis min.

P.e.—Ĉu li do ekbatis vin? Se jes, starigu atestanton kaj rapidu al la eksedziĝa proceso...

V-ino:—Kion vi diras, policestro! Mia edzo nek min trompis, nek min batis.

P.e.—Fm.!...Ah! Mi divenas.—Li frenezigis, sendube, ĉu vere?

V-ino:—Certe kiel vi diras.

P.e.—(*ridetante*) Jen mi estas sperta divenanto. Ĉar mi jam alkutimiĝis al tia afero. Vi do ricevu mian konsilon. (*La virino kappjesante sidiĝas*)—Revenu hejmen jam sen maltrankvilo kaj pretigu tagmanĝon. Via sinjoro troviĝos jam ne freneza, kiel mi.

V-ino:—Ne, ne, li estas efektive freneza.

P.e.—Ne povas esti.

V-ino:—Jes, li estas terure freneza.

P.e.—Ĉu li do estas drinkemulo?

V-ino:—Ne, neniam.

P.e.—Ĉu li do ne apartenas al frenezula sanglinio?

V-ino:—Kredeble ne. Sed en efektiveco li babilaĉas sensencaĵojn kaj agas senhonte kiel malprudenta sentaŭgulo.

P.e.—Ekzemple kion li babilaĉas kaj faras?

V-ino:—"Kion?"...Nokte! Jes, en la mezo de la nokto, li sola ion babilaĉas kaj mi la tutan nokton eĉ momenton ne povas dormeti.....Jen ĵi cerbumas sensencaĵojn, jen li ekminacas, jen li longe meditas. Kaj foje li elsaltas el sia lito kun pistolo en la mano, ekkriegas:—"Kiu ajn ektuŝetu mian edzinon, mi tuj pafmortigus!" Ĉu ĉiuj ĉi tiuj vortoj povas esti nefrenezaj?

P.e.—Supozeble kaŭze de ĵaruzo.

Vino:—Jes, ĵaruzo.

P.e.—Jes, certe.

Vino:—Ah! Vi respondas tro simple. Ĉu vi do pensas esti ĵaruzo, ke li longan tempon sidas en necesejo laŭte kriegante ridindajn aferojn. Krom tio, li vokas furioze ĉe ĉiu sia paŝo, "Unu, du; Unu, du!" Kaj tial niaj najbaroj mokridas je li kaj eĉ knaboj ĝoje lin petolaĉas.

P.e.—Vi troigas, ĉu ne, sinjorino?

V-ino.:—(*demordante ungon*) Ne, vere estas tiele.

P.e.:—(*levante la ŝultrojn*) Tre ne povas esti. Se tamen tio estas vera rakonto, li jam de longe devus esti arestita pro lia kontraŭleĝa konduto rilate al la strata ordo.

V-ino.:—Ne, estro, pri la kontraŭleĝa konduto, nur legomajistojn arestas policanoj...

P.e.:—Certe mi estas bonanima, kaj tial mi aŭskultis vian sensencaĵon. Sed mi jam plu ne permesos al vi tian nedecan parolmanieron. Cetere mi havos multajn laborojn...

V-ino.:—(*stariĝante*) Do nur unu vorton plu! Nuntempe li estas danĝera nur al mi sed baldaŭ poste li estos danĝera por vi ĉiuj!

P.e.:—Bone! Tiutempe mi havos mian rimedon!

(*La virino foriras.*)

Voĉo.:—Estro!

Pol.:—He! Kiu estas?

Voĉo.:—Mi volus intervidi vin nur momenton, nur momenton!

Pol.:—Ĉu vere momenton?

Voĉo.:—Jes, unu minuto sufiĉas.

Pol.:—Ĉu vere unu minuton?

Voĉo.:—Jes, se plej longe.

Pol.:—Eniru, do!

(*Bourroko aperas ĉe la pordo, forprenas ĉapelon kaj marŝas antaŭen al la mezo de la scenejo.*)

Pol.:—Nu, mi aŭskultos.

Bour.:—La afero estas simpla, estro. Hieraŭ vespere mi ektrovis horloĝon sur la strato Saint-Michel, kaj mi venis alporti ĝin.

Pol.:—Horloĝon?

Bour.:—Jes, horloĝon.

Pol.:—Montru ĝin.

Bour.:—Jen estas, estro.

(*El la poŝo elprenas la horloĝon kaj transdonas ĝin al la estro, kiu esploras kelkan tempon.*)

Pol.:—Certe estas horloĝo.

Bour.:—Jes, ne povas esti alia.

Pol.:—Dankas por via afableco. (*Aliras al la tablo kaj enmetas la horloĝon en la tirkeston.*)

Bour.:—Ĉu mi jam povas foriri?

Pol.:—(*Retenante per mangesto*) Ankoraŭ ne.

Bour.:—Mi devas rapidi.

Pol.:—Estas bedaŭrinde.

Bour.:—Mia amiko atendadas min...

Pol.:—(*severe*) Lasu lin atendi.

Bour.:—Ha! Sed...

Pol.:—Nur kelkan tempon. Vi ankoraŭ ne rakontas, kiamaniere ĉi tiu horloĝo estis forlasita sur strato.

Bour.:—Pri tio, mi jam nun diris, ke mi ĝin trovis sur strato Saint-Michel, ĉu ne?...

Pol.:—Pri tio, mi jam aŭdis, sed en kiu loko?

Bour.:—En kiu loko? Sur la tero.

Pol.:—Ĉu sur trotuaro?

Bour.:—Jes.

Pol.:—Estas strange. Neniu ja forlasos horloĝon sur trotuaro, strange!

Bour.:—Laŭ mia opinio...

Pol.:—Mi ne bezonas aŭdi vian opinion. Vi informu vian personecon.

Bour.:—(*ekscitiĝante*) Mi nomiĝas Bourroko. Jan Ustache estas propra nomo. Naskiĝis en Poutoŭaz la 29-an de Dec. 1860. Patro estas Alfons Jean Jack, Alfred, Oskar Bourroko. Patrino estas el Sest Numeror...

Pol.:—Sufiĉe; kaj adreso?

Bour.:—Strato Petero. numero 47. Sur dua etaĝo.

Pol.:—(*notskribante*) kaj kiom da posedaĵoj?

Bour.:—Jara enspezo du mil frankoj. Unu domo, sep hundoj, 3 katoj, leporoj 11, porkoj.

Pol.:—Sufiĉe. Je kioma horo vi ĝin eltrovis?

Bour.:—Je la 3-a nokte.

Pol.:—Ĉu ne estis pli frue?

Bour.:—Ne, estro.

Pol.:—Vi do vivas tre neordinare.

Bour.:—Mi vivas laŭ mia plaĉo.

Pol.:—Tamen mi havas rajton suspekti, ke vi en tia horo de l'nokto vagadas sur strato Saint-Michel malproksima de via loĝejo.

Bour.:—Tio ne estas via afero.

Pol.:—Nu, kion vi ja faras tiel malfrue?

Bour.:—Mi estis revenanta de mia amikino.

Pol.:—Kion ŝi faras, tiu via amikino?

Bour.:—Ŝi estas iez edzino.

Pol.:—Kies?

Bour.:—de apotekisto.

Pol.:—Kian nomon li havas.

(*Daŭrigota*)

Tathagato propriis al si la Plejsuperan Veran Vekiĝe-

con (t. e. Budhecon). “Kion vi pensas, Ĝariputra, pro kio tiu Tathagato estas ankau nomata Amitabha (supermezura luno)? Vere mi diras al vi denove, Ĝariputra, la luno (abha) de tiu Tathagato senbare trairas tra ĉiuj Budhaj regnoj; pro tio tiu Tathagato estas nomata Amitabha.

“Kaj, Ĝariputra, kun tiu Tathagato estas aro da sen nombraj disĉiploj, puraj Arhatoj ne facile mezureblaj.

de unu ciklo estas nomata “malgranda Kalpo”, kaj tiu de 20 cikloj “meza Kalpo.” Kvar sinsekvantaj mezaj Kalpoj, el kiuj la unua estas nomata “Kreiga”, la dua “Restada”, la tria “Detruiga”, kaj la lasta “Neniiga”, faras unu Kalpon aŭ pli precize unu grandan Kalpon (Mahakalpa). Laŭ ĉi tiu difino la tradukinto ĝin kalkulis kiel jene:

Malgranda Kalpo = $(84,000 - 10) \times 100 \times 2 = 16,798,000$ jaroj.

Meza Kalpo = $16,798,000 \times 20 = 335,960,000$ jaroj.

Granda Kalpo = $335,960,000 \times 4 = 1,343,840,000$ jaroj.

Formalklerula difino de Kalpo, donata de Budho mem: — “Kalpo estas longa, longega tempo. Supozu ie kuŝas roko kun grandeco de 100³ joĝanoj (unu joĝano = 9 mejloj proksimume). Unu anĝelo tien venadas ĉiuentjare unufojon, kaj ekfrotas la rokon per la maniko de la robo silka. La tempo forpasas kaj forpasas, kaj la homo agadas regule por ĉiam. La roko frotata forskrapigas iomete post iomete, kaj fine estas tute malestigita. Ĝis tiam kompreneble longa, longega tempo forpasis, sed la daŭro de Kalpo ankoraŭ ne finiĝas.” — La komparo estas farata lertege, sed multe trograndiĝe, mi opinias.

da palmirarboj kaj la pendantaj tintilretoj estas move-

tataj de venteto, tiam bela agrabla sono elsonas. Nun Sariputra, supozu, ke centmil dekmilionoj da ĉielaj muzikinstrumentoj estas ludataj de honorindaj homoj, tiam kompreneble bela agrabla sono elsonas; tiel same, Ĝariputra, kiam la vicoj da palmirarboj kaj la pendantaj tintilretoj estas movetataj de venteto, tiam bela agrabla sono elsonas. Kaj kiam la homoj aŭdas tiun sonon, tiam rememoro pri Budho aperas en ili, rememoro pri Leĝo aperas en ili, rememoro pri Eklezio aperas en ili. Tiamaniere, Ĝariputra, per la merito-

plenaj ornamatoj de Budha regno, solenigata estas tiu Budha regno.

“Kion vi pensas, Ĝariputra, pro kio tiu Tathagato estas nomata Amitajus? Vere mi diras al vi denove,

Sariputra, la vivodaŭro (ajus) de tiu Tathagato kaj tieaj homoj estas supermezura (amita); pro tio tiu Tathagato estas nomata Amitajus. Kaj ĝis nun, Ĝariputra, dek Kalpoj¹³⁾ jam forpasis, depost tiam, kiam la

13) Kalpo (Kalpa, 劫波, 劫). Hinda kosmologia jaro, aŭ granda unuo de la tempo; jen unu el kelkaj difinoj, kiuj estas iom malsamaj unu kun alia. La vivodaŭro de homo estas ŝanĝema regule laŭperiode. Iam ĝi estis 84,000 jaroj, kaj poste fariĝas ĉiuentjare plimalonga po unu jaro, kaj fine atingos sian malsuprolimon t. e. 10 jaroj. Tiam ĝi fariĝos plilonga ĉiuentjare po unu jaro, kaj fine atingos denove la suprolimon t. e. 84,000 jaroj. Ĉi tiu daŭro

Tiamaniere, Śariputra, per la meritoplenaj ornamadoj de Budha regno, solenigata estas tiu Budha regno.

“Kaj, Śariputra, la estaĵoj naskiĝintaj en la Budha regno de la Tathagato Amitaĵus, estas Bodhisatvoĵoj puraj, nedegenerontaj, destinitaj fariĝi Budhoj post unu renaskiĝo, kies nombro, Śariputra, ne estas facile kalkulebla, tiel ke oni povas ĝin esprimi nur per la vorto nemezurebla, aŭ nekalkulebla. Vere mi diras al vi denove, Śariputra, estaĵoj nepre devas sopire meditati pri la Budha regno. Pro kia kaŭzo? Pro tio, ke tie oni kunvivadas kun tiaj bonegaj homoj. Per helpo de malgranda bonradiko,¹⁴⁾ tamen, Śariputra, estaĵoj ne povos naskiĝi en la Budha regno de la Tathagato Amitaĵus. Sed, Śariputra, ĉiu filo aŭ filino de bona familio aŭdu la nomon de la adorata Tathagato Amitaĵus, kaj ĝin aŭdinte pripensadu, pripensadu kun nedisiĝinta konscio en la daŭro de unu nokto, aŭ du noktoj, aŭ tri noktoj, aŭ kvar noktoj, aŭ kvin noktoj aŭ ses noktoj, aŭ sep noktoj; tiam, en la momento, kiam tiu filo aŭ filino de bona familio estos mortonta, la Tathagato Amitaĵus, ĉirkaŭata de aro da disĉiploj, kaj sekvata

14) **Bonradiko.** La vorto signifas nenion pli ol “bonfaro” aŭ “bona konduto.” Por konservi kiel eble plej bone la ideon de la originalo (Sanskrite Kuśalamula; Ĥinlingve 善根), mi tradukis laŭvorte per ĉi tiu kunmetita vorto. Efektive, laŭ Budhismo, bonfaro en nia estanta vivo estas “radiko”, el kiu ekĝermos bona rezultato en la venonta aŭ postmorta vivo.

de procesio da Bodhisatvoĵoj, aperos antaŭ la mortontoj, kaj ĉi tiuj mortos sen kormaltrankviliĝo, kaj postmorte renaskiĝos en la Budha regno de tiu sama Tathagato Amitaĵus, la mondo Sukhavati. Tial, Śariputra, rimarkinte ĉi tiun veron, mi riverence diras tiel: Filo aŭ filino de bona familio nepre devas sopire meditati, kun tuta koro, pri tiu Budha regno.

“Kaj, Śariputra, kiel mi nun ĉi tie laŭde proklamas pri tiu Budha regno, tiel same, Śariputra, en la Oriento, Tathagato Akṣobhja, Tathagato Merudhvāga, Tathagato Mahameru, Tathagato Meruprabhasa, Tathagato Maṇḍūdhvāga, kaj, Śariputra, ceteraj adorataj Budhoj en la Oriento, grandnombraj egale al la sableroj ĉe la rivero Ganga, surkovrante siajn proprajn Bunhajn regnojn per la langoj, deklaradas: ‘Akceptu vi ĉi tiun sekcion de la Leĝo, nomatan Favoro de ĉiuj Budhoj, kiu laŭde proklamas pri la neimagebla merito de la Budha regno.’

“Kaj tiel same en la Sudo, Tathagato Candrasurjapradipa, Tathagato Jasaprabha, Tathagato Mahāśikandha, Tathagato Merupradipa, Tathagato Anantavīrja, kaj, Śariputra, ceteraj adorataj Budhoj en la Sudo, grandnombraj egale al la sableroj ĉe la rivero Ganga, surkovrante siajn proprajn Budhajn regnojn per la langoj, deklaradas: ‘Akceptu vi ĉi tiun sekcion de la Leĝo, nomatan Favoro de ĉiuj Budhoj, kiu laŭde proklamas pri la neimagebla merito de la Budha regno.’

先 從 隗 始

〔投書よりも投稿を〕

一二ヶ月前に『Revuo ×月號編輯後記をみるさ××の△△△に對する編輯子の賛辭を讀んで今更あんな△△△に對して賛意を表する編輯子××文學士の××眼の程度に呆れた。恐らく△△△に對する批難の投書は編輯机上山をなしてゐよう我輩もおくればせながらこの一票を投じた。……』といった匿名の投書がきた。勿論これは投書者の真意は△△△に對する不満の表明といふよりも我々編輯子に對し罵詈を加へて快哉をさげふためのものであらうと思ふ。もし△△△に對しての意見の表明なら何もこんな手厳しい攻撃でなくて『Revuo ×月號の△△△は面白くないと思ふがやめられては如何』と書いて本名を名乗つてでられるにちがひない。本名を名乗らぬ所はつまり我々編輯子への不満を△△△を材料として投付けられたにすぎないと思ふ。

所でこんな投書を手にした編輯子は大抵は苦笑ですますがやはり人間の悲しさで内心は却つてあく迄も△△△を擁護してゆこうとする様な反抗的氣分のおこるのを禁じえない。しかもこの投書者の想像の如くしかく澤山の△△△に對する反對投書が机上に山積したものでなく△△△に對する投書は其の數僅か數通にすぎずしかも賛否相半してゐるに於て猶更である。

我々編輯子は決して好加減の與太編輯をやつてゐるのではない。學會の機關誌として恥しくない様にさ考へてへまをしない様にさ一生懸命で努力をつゞけてゐるのである。唯何分朝から晩までこれにかゝりきりになれないので——他に自分の職業をもつもの故——時間の不足や材料の不足のため皆様の御希望にそふ事のできぬのを遺憾としてゐるが決して與太氣分で編輯をやつてゐるものでもなく又つまらぬ功名心でやつてゐるものでもない。唯只管學會の機關誌たる本誌を遲滞なく又相當氣のきいたものとして出したいと専心努力してゐるものである。それが皆様の中の或方々にお氣にいらぬといふのはそれは編輯子さその人々さの趣味の相違からくる事である。會員二千數百人のごなたも満足する様な雑誌はどんな人が編輯したさて出来るものでない事は事明の理である。然らば兎に角眞面目に編輯してゐる編輯子へのお小言はもつと穩かな溫みのあるものであつてほしい。勿論我々

の机上にはそういった情味の濃かな投書もくるが匿名のものは上の例の様に罵詈ザンボーの言にみちてゐるのが多い。(勿論こんなのは年々數通くるにすぎないが)。編輯子へのお叱言はかくの如き與太投書でなく眞面目なものであつてほしい。自分の信する所を眞面目にまつすぐに述べる事ができない様では他人を動かせるものでない。匿名で出した手紙に efiko をみさめる人がありさすればそれは愚かな人だ。匿名で罵詈の言を連れる様な與太投書を顧みる編輯子はどこにもあるまい。編輯子の眞面目に對し投書家の眞面目を期待する。我々もこんな投書をみるさ僅か毎月廿錢といふ小額の會費をおさめながら自分の自由の時間を毎月數十時間 Revuo 編輯のために無報酬で勞力を提供してゐる編輯部委員諸君に對してよくまあこんな亂暴な事が云へるものださ遂云ひたくなつてくる。我々は決して我々の努力を有難くおもつてほしいともほめてほしいとも云ふのではない。唯我々の仕事に對する御注文は穩かな言葉で匿名でなく本名を表してのべていたゞきたいと思ふからこゝに書いた迄である。

以上で編輯子への投書の事は切り上げて編輯上の事を申上げる。

編輯部の新陣容立直しを考へ近々委員會をひらいて相談をする心算であるが私が之迄さつてきた——小坂氏外遊後多少の全責任をひきうけてやつてきた編輯方針はその間前後殆んど一貫してゐるが——編輯方針は

1) 編輯部宛に來た原稿は差支へない限り残らず掲載する事。(この方針で殆んど之迄没書にした原稿はない。——これは何故かといふに原稿は仲々集らないもの故(原稿には何等謝禮をださないからかもしれないが)送つて來た原稿は一つ残らず没書にせずとも space が不足しない事と頼んだからさてよい原稿が集るわけではなく作者から送つて來られる様なものは相當自信を以てよこされるものだしといふ事とその内容が私自身にさつて面白くないと思つたさて作者には興味のあるものと思はれるから作者と同感の人と讀者には多い事と考へた事等によつてである。それで或人々は編輯子の無方針無定見を云々せられたがある種類の原稿でも毛嫌ひせずあつめると云ふ一定の方針によつたものである。あらゆる

方面の人々を網羅する會員を讀者とする本誌として之より外に方法がないと思つたからである。

2) 編輯部委員諸君には毎月無理強ひでも擔當原稿を書いてもらふ事。内地報道海外報道作文解答といった風なものは誰しもよるこんで書くものではないが誰か整理して書かねばならぬもの故これは私自身でやつた事もあるが委員諸君にお願いしたものが多い。又初等や中等の講義も同様毎號人をかへないで書いてもらふ事にしてゐる。

3) 編輯部委員外の人々へは原稿をお願いした事も度々だが大抵は『多忙に付暇になる迄まつてもらひたい』といふ御返事が多いのでこれはあまり期待できないものであつた。A先生の如きは卷頭言を書いていただく事を快諾されてこちらへ原稿をおくつて下さる期日も承諾して下さつたにもかゝらず今もつて書いて戴けないである。——或人の投書に『卷頭言にはぜひA先生にお願いしては如何。編輯部では何故お願いしないか』と云ふ手紙を受取つたが上の様の次第である。A先生の御忙しい事は承知であるが我々編輯子も多忙であるので先生のお宅へおうかゞひして膝詰談判で書いていただく程の餘暇のない事は遺憾である。上の様な次第で我々はエスプレランチストの會合のある際に出會つた人々には何時でも口癖の様に『原稿を下さい』と云つてゐるのですがごなたも忙しいと見えて仲々書いてくだらない。以上の様な様に思つた原稿は仲々あつまらない。たまたま欲しいと思ふ原稿をお願いすると別の原稿をおくつてくれるといふ有様で永い間の経験から到底編輯子の個性を發揮した様な編輯振はできないのが本誌の特色だとあきらめをつけて編輯をしてゐる。

4) できるだけ編輯子の個性を没却する事本誌は學會の機關誌であるからなるだけ編輯者の個性を没却する事につとめた。それで或一部の人からは本誌には編輯子の生命がないといふ批難をうけた。しかし私は今でも學會の機關誌は編輯子はたゞ忠實なる學會の下僕にすぎないもので『集つた原稿を整理して編輯するだけで學會のあらゆる方面の關係を顧慮して行動すべく徒らに勝手氣儘自由奔放な編輯振をなすべきでない』と思つてゐる。編輯子が學會のあらゆる立場を考へずに自分の趣味のまゝに振舞つたらそれは個人雑誌の様なものになつてしまつて學會の雑誌とは云ふ事ができぬ様になると思ふ。

以上述べた四つの主なる方針の下に編輯をした過去數年の本誌は皆様からみて甚だあきたらないものであつたかもしれませんがそれは半は私の不明の致す所であり半は周圍の事情やむをえなかつたものです。

こゝでこんなことを申し上げたのはつまり學會編輯部は如何なる方法で皆様が鞭撻さるべきかを申し上げたかつたからです。私の言はんとする結論はつまり

◎編輯上の意見は單なる意見の開陳でなく直接行動が一番有效だと云ふ事を申述べたまでです。即ち上の様な編輯方針ですからこんな原稿をのせてほしいと考へる時はその意見の開陳よりもその希望の原稿を自ら作つて投稿するか自分でできないものはそんな原稿のできさうな人々に自ら依頼して自分の望む原稿を作つてもらつて學會編輯部宛お送り下さる事です。直接行動と云ふと語弊があるかもしれませんがこれが一番手取早いやり方です。編輯子宛の御意見だけでは仲々編輯子の手でそういった原稿ができない事も多く又時には編輯子に十分その人の意見がのみこめない事もありますから實物を以て示されるのが最も有効な方法です。

例へば來年度の本誌の表紙にしてもこんな *desegno* をほしいといふ方は自分で書くなり人にかいてもらふなり又は他の雑誌その他の *desegno* を送附されるなりして編輯部を鞭撻して戴きたい。編輯部は無報酬で書いてくださる *desegno* ならどんなものでもよるこんで歡迎致します。但し表紙は一つきりしかいりませんから取捨撰擇は學會評議員會におまかせ下さい。誰がみてもよい *desegno* なら決して没になる筈がありません。

私の云ひたい事はこれだけです。兎に角蔭で他人の行動は何とでも云々できますが自らやるとなると仲々できないものです。どうかこんな原稿をのせたてほしいと思ふものは實物をつくつてドシドシお送り下さい。

上に一寸述べた如く近々編輯會議を開いて新編輯方針を決定しますが併しどんな方法をとつたとしても理論よりも實際上からはこれ迄の編輯方針と大して變つたやり方はあまりできないものと思ひます。ですから上にのべた様な『直接行動』が依然として有効と思ひます。どうかまはりくごい意見の開陳より卒直に實物を以て示していただくことを。

外にも申述べた事はありますがそれは又何時か折がありませう。

(岡 本 記)

學 會 取 次 洋 書 目 録

★洋書は如何なる場合でも前金注文でなければお送り致しません★

(定価圓(送料錢))

- ★Vortoj de Cart エスベラント學士院長 Cart の論說全集、勁拔模範の筆致1.10 (6)
- ★Fatala Ŝuldo 過去を透視する不思議な婦人の力、因果律の巧なる小説化1.10 (8)
- ★Karto Mistera 運命を繰る奇々怪々のカード、巴里の秘密、Payson 老譯0.30 (2)
- ★Antikva Romo Surmare 世界の大立物黒シャツの宰相 Mussolini の著述1.00 (6)
- ★Pro Kio? 犯人追ふて國際的大舞臺の大立ち廻り、原作探偵小説1.30 (4)
- ★Kantistino 舞臺の花たる歌ひ女の運命は華か慘か、有名な Hauff の作0.40 (2)
- ★Aspazio 波蘭代表作 Svjentošovski 悲劇、Majstro の舎弟 Leono Zamenhof 譯0.80 (4)
- ★Advokato Patelin Brueys 及 Palaprat 合作三幕喜劇、Evrot 譯、佳譯0.30 (2)
- ★Sokrato 巴里大會で上演のため譯せる Richet 作韻文劇、J. Couteaux 譯0.65 (6)
- ★Amfiltriono 喜劇王モリエール作三幕物韻文喜劇、Legrand 譯、平易0.55 (4)
- ★Bukedo 原作及び各國よりの翻譯の興味多き作品を集めたるもの、二巻で0.60 (4)
- ★Etiko Kropotkin 著『倫理學』S. A. T. 發行物1.00 (6)
- ★Galerio de Zamenhofoj ザメンホフ先生一家の人々の肖像集、附録系圖0.55 (2)
- ★Lilio 女流作家として有名な濠洲 Sinnotte 夫人の原作小説1.35 (6)
- ★International Radio-Manual エス英ラヂオ辭典、説明挿繪入0.15 (2)
- ★Stranga Heredajo エス原作大家 Luyken の大作、興味津々人物活躍2.85 (8)
- ★Palaco de Danĝero 妖艶 Pompadour 夫人戀愛葛藤、Payson 老譯、美本3.10 (6)
- ★Malŝparulo 十九世紀オーストリー知名の劇作家 Raimund 作、Zwach 譯1.05 (4)
- ★Internacia Mondliteraturo 各篇世界の代表的文藝作品、譯は何れも推賞に値するもののみ、
各號 0.70 (4) 倍號は 1.40 (6)。

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 2. Legendoj, A. Niemojewski | 14. La firmao de la kato, Balzac |
| 3. Elektitaj Noveloj, Turgenev | 15. Orientaj Fabeloj, Doroŝevič |
| 4. La Nigra Galero, W. Raabe | 16. Noveloj, Sienkiewicz |
| 5. "Camera Obscura" Hildebrand | 17. Insulo de feliĉuloj, Strindberg |
| 6. El la Skizlibro, Wash. Irving | 18. Barbaraj Prozajoj, Bertrana |
| 7. La mirinda historio, Chamisso | 19. Ano de l' ringludo, Ŝimunoviĉ |
| 9. Hebreaj Rakontoj, Ŝalom-Alehem | 20. Servokapablo! Eekhoud |
| 10. Tri Noveloj, Puŝkin | 21. Nobela Peko, Sadoveanu |
| 13. Ses Noveloj, Allan Poe | |

★Biblioteko Tutmonda 最も多方面の文獻を集めた叢書、各 Serio2.00 (8)

Serio I (六冊): Mateo Falcone, Mérimée. La Malgranda Johano, Eeden.
La Arto de Memdisciplino, Psikagogio, Baudouin. Norda Vento, Karinty.
La Songa de Makaro, Korolenko. Niĉjo Mensogulo, Voinesti.

Serio II (五冊): Grekaj Papirusoj, Penndorf. La Vojaĝo, Munchausen.
La Kapitanfilino, Puŝkin. La Homa Lingvo, Collinson. Bonhumoraj Rakontoj.

- ★Malnovaj Paĝoj 1896 年の Lingvo Internacia 誌に出た十四篇を輯む0.40 (4)
- ★La Nevo kiel Onklo 獨文豪 Schiller 作三幕喜劇、Ch. Stewart 譯0.20 (2)
- ★Mallumaĵoj ハンガリー知名の A. Arpad 作小説、L. Pal 譯0.20 (2)
- ★Barbra 英文壇に名をあげた Jerome K. Jerome 作の一幕劇0.55 (2)

- ★Boks kaj Koks John Maddison Morton の一幕喜劇、譯は Ch. Stewart0.15 (2)
- ★Bombasto Furioza Barnes Rhodes 作悲喜劇のオペラ、Ch. Stewart 譯、繪入0.10 (2)
- ★Elektitaj Humoraj Rakontoj 名の如く滑稽物語九篇を集めた好箇の讀物0.20 (2)
- ★Aventuroj de l' Lasta Abenceraĝo Granado 王朝亡命時代の物語0.15 (2)
- ★Du Rakontoj D. de Rothau の原作短篇小説二篇、行文流暢0.30 (2)
- ★Fundamento de Kvakerismo 英國の生んだ新教ケーカー宗教義解、大冊、Butler 譯0.95 (6)
- ★Malbela Anasido Andersen お伽噺一篇、初級讀本として發行せるもの0.05 (2)
- ★Natan la Saĝulo 有名なレッシングの美しい韻文劇、Karl Minor 譯1.00 (4)
- ★La Tajdo エス文壇知名の N. Hohlov の詩集、心の高調を詠じたる四十篇0.65 (2)
- ★Ŝakludado 將棋にかけた命と戀、Giacosa の南國情調の韻文劇0.35 (2)
- ★Cavalleria Rusticana 場面はシシリー島の一隅、G. Verga の劇0.35 (2)
- ★De Apeninoj ĝis Andoj E. de Amicis 作、少年少女の讀み物としての物語0.30 (2)
- ★Rido Sanigas! 笑ふ門には福來る! 面白い笑話數十を集めたもの0.20 (2)
- ★La Ĉaso al Diablo 滑稽間違物語、U. E. Bersetzerre 作小品0.15 (2)
- ★El la Landoj de Ruinoj 波蘭 Wyslouch の散文詩、Grenkamp 譯0.12 (2)
- ★La artefarita "Altmontarsun"-bano 人工高山日光浴療法に就て0.10 (2)
- ★Ilustrita Biblioteko, II-a Serio 各號 0.25 (2)、倍號は倍、Serio 四冊で1.10 (4)
- 6-7. La Ŝipĉarpentisto 浪にゆられて外つ國を巡る船乗りの物語。
8. El "Navigado estas necesa" 漁村に生れ海に死んだ詩人 Goch Fock の物語。
9. Gudrun 北海のほとりを舞臺とする中世紀の海の傳説詩、Teo Jung 筆。
10. La hantataj ŝipoj 『幽霊船』及 Ŝuldpedelo sur la Maro 二篇。
- ★R. U. R. (Rossum's Universal Robots) 有名な Čapek の『人造人間』1.00 (6)
- ★La Revizoro 露文豪ゴーゴルの喜劇。譯筆輕妙。一讀抱腹絶倒0.80 (4)
- ★Prozo Ridetanta Schwartz 氏得意の奇文集。本年度 Akademio で入賞1.50 (6)
- ★Rompantoj Valjes がバルセロナの大會に自演して好評を博した獨白五篇0.40 (2)
- ★Aspazio Svjentoĥovski 作 Leono Zamenhof 博士譯。悲劇0.80 (4)
- ★Verdkata Testamento Schwartz 氏得意の諧謔詩數十篇1.00 (8)
- ★Manon Lescaut 映畫小説でしられたマノン・レスコオ1.10 (4)
- ★Tatterly 奇々怪々探偵小説 Tom Galton 作 Wilson 譯0.55 (4)
- ★Krioj de l' Koro 雄辯界の一人者 Grenkamp が青春の詩集0.15 (2)
- ★La Reĝo Lear 末娘に救はれる悲慘なリヤ王の話。沙翁悲劇、並製1.45 (6)
- ★Taglibro de Vilaĝ-Pedelo Blicher 作 Bulthuis 譯、人生の指針0.30 (2)
- ★Malriĉa en Spirito 原作界の大家 Bulthuis 作の二幕劇0.30 (2)
- ★Evoluo de Telefonio 電話器の發達について挿繪入0.55 (2)
- ★Esperanto per Instruaj Bildoj (Bildotabuloj) 20×26 cm. の大版、36 の寫眞版で、
ホテル、郵便局、停車場、男女服裝の部分品名等實地教授式、104 頁1.90 (6)
- ★Petit Cours Primaire d'Esperanto 繪入で小供にも向く初歩教科書、136 頁0.35 (4)
- ★Unua Legolibro D-ro Kabe 著讀本、小話小説會話日用文を収む初學者必携0.70 (4)
- ★Supera Kurso 高等エスペラント教科書として評判の言語委員 D-ro Dreher の著0.45 (2)
- ★Millidge エス英辭典4.40 (6)
- ★Rhodes 英エス辭典2.10 (12)
- ★Benneman エス獨辭典2.15 (4)
- ★Benneman 獨エス辭典4.35 (8)
- ★Maŝinfaka Terminaro エス獨、獨エス機械工學辭典1.05 (2)
- ★Lingvaj Respondoj ザ博士の語學上の質疑應答集0.70 (4)
- ★Refleksiva Pronomo Akademio 文法部長 Lippman 氏の研究發表0.25 (2)

★ 吾人の熱望せしカードは遂に出現せり ★

エスペラント單語カード

小坂・岡本校閲
城戸崎益敏編

日本エスペラント學會發行

abomen-i ~n [1]

1) -o 2) -(ind)a

1) Oni perfidon prenas, sed perfidulon abomenas.

② Li sentis abomenon kontraŭ si mem.

③ Ho, kiel bestaj kaj abomenindaj aperas ĉiuj agoj de la mondo!

4) Ĉiu abomenaĵo havas sian adoranton.

語 數——720

合成語——3500

文 例——2800

1) 印は Proverbaro より

★ 印は parafrazo

嫌惡する, 嫌ふ [1]

1) 嫌忌 2) いやらしい

① 自分は裏切りながら (自分の事は棚に上げ) 裏切者を忌み嫌ふ。

② 彼は自分自身は愛想がつきた。

③ まあ 何さ 地上一切の行爲があさましく、いやらしく思はれることよ!

④ 蓼喰ふ蟲も好きずき。

1)
① Li
la
2) Ne
de

★ Prezenti per bildo, farita per krajono aŭ plumo.

[實物大]

送 定
料 價
十 一
二 圓
錢 七
錢 十
錢

頑丈なる箱入

單語は單語そのものとして覺へず、その用法を文例に於てのみこむことが肝要である。この目的を以て本カードは數月の日子を費して完成せしもの。その内容の充實せる、印刷の美麗なる、價の廉なる、本邦で發賣せられてゐる英語や獨逸語のカードに比して數等優れるものである。其内容は

1) 語數——動詞、形容詞、前置詞、助辭等より最も基本的なる 720 語。それより誘導さるる合成語數千を擇んだ。

2) 文例——約 2700. 基本單語、合成語を始め色々の有益、興味ある用法を Zamenhof の著書其他より引用した。

3) 動詞の支配——各動詞は凡てその支配する格及前置詞を明示した。

故に初學者は單語の記憶に、中等の學習者はエス文和譯の研究に、高等の學習者は和文エス譯の研究書として使用すべく、實にエスペランティスト必携の好伴侶である。

★エスペラント文例集 (定價 1 圓 70 錢) (送料 8 錢)

上記「カード」は單に暗記用としてのみでなく Z 博士其他の文例を記載せるもの故書籍の形で活用したいと希望せらるゝ方のため上記カードと同一内容のものを四六倍大判 150 頁に印刷せしもの。紙質上等。朱色枠入二色刷の贅澤版。

本邦で出版の **學會取次書其他目錄** (註文は前)(學會の振替口座は) (金に限る)(東京 11325 番)

	價 圓 送 錢		價 圓 送 錢
★ザ博士演説集……………	0.80 .4	★緑の星に憧れて……………	1.20 .8
★夜の空の星の如く (同上和譯) ……	0.80 .6	★新魔王 (エス文) ……	0.30 .2
★我國における外國語問題とエス…………	0.60 .4	★悪 夢 (エス文) ……	0.20 .2
★カルロ (四方堂版) ……	0.20 .2	★大成和エス辭典……………	4.80.18
★心の片隅……………	0.50 .2	★大成エス和辭典 (在庫品整理) 特價	0.80 .4
★詩集花束……………	0.80 .4	★模範エス會話……………	1.20 .4

◆日本語エスペラント小辭典 (三高) [普及版] ((値下))……………0.50 .2

◆模範エスペラント獨習 (秋田、小坂共著) [普及版] ……1.00 .8

◆日・エス 對譯 會 話 と 辭 書 ……普及版 0.65 .6 上製 0.85 .6

◇エス絹ハンケチ [本誌七月號 廣告のもの] A 種 85 錢 B 種 75 錢 送料各 2 錢

(B 種は週名入です——希望の曜日申出の事)

自然科学同好諸士へ! 本年度大會での自然科学分科會の決議により「自然科学同好會」なるものを設け「自然科学同好者名簿」及「エス語書き自然科学關係の文獻目錄」を編纂する事になりました。どうせ作るなら成るべく完全を期したいと思ひますが同志の方々の御助力を仰ぐより外に道がないと思ひます。依つて此際此仕事にお力添へ下さらうとなさる各地同好諸士に次の二つの事をお願い致します。

(1) Esperanto で自然科学 (數學等も含む或は理學の方可ならんか) を専門に研究されてゐる方及其の道に興味をもたれる方の住所姓名及學科名を御通知さる事。

(2) 毎月日本内地は勿論世界各地において公にされたエス語書き自然科学關係文獻 (専門と通俗とをさへず文の長短を論ぜず) の「題目」「著者、發表者名」「出版所出版年月日」「頁數」又雑誌の論文なる時は誌名號數頁等を御明記の上御通知下さる事。事務所は當分の中學會内に設けます。宛名は 日本エスペラント學會内 自然科学同好會

【注意】 醫學農學工學等の應用學は同好會の範圍外と致します。但し上記第 2 項のエス文獻御通知は學會圖書部にて整理記録のため應用學の方も精神科學の方も含めて學會宛御通知下さる事を望みます。すべて R. O. 誌上で紹介致します。(學會圖書部)

★大會紀念寫眞 申込者へ發送濟。代金未納の方は代金御拂込の事。御入用の方は御申込下さい。但し送料共代價金一圓です。

★Koloidkemia Terminaro 膠質化學術語集。前田勤氏編。希望者にお頒ちします、但部數謹少。代價 10 錢 送料 2 錢。

★寡婦マルタ Z 博士エス譯 Marta を清見陸郎氏和譯のもの。改造文庫版。價 30 錢 送料 4 錢。學會で取次販賣す。

★Originala Verkaro Zamenhof 博士のエス語原作文集。エス學士院副會頭 Dietterle 博士編。エスペランチスト必携の聖典本書をもたずしてエス語を談すべからず。本書については本誌本文記事参照下さい。(定價 15 マルク) 特價 7 圓 50 錢 書留送料 27 錢 (植民地 55 錢)

◆リングワイ・レスポンドイ 大會中發行の豫定の本書は上記 Originala Verkaro の出版により同書中より Z 博士の Lingvaj Respondej に屬する新材料を得たるを以てそれを附録 (菊半 30 頁増加) として添附のため發行遅延十月中旬發行。價未定 (十一月號に詳報)。

1930

下記の來年度雜誌の購讀を取次ます (一年以下は) (取次ません)

Esperanto { 雜誌のみの購讀——年 4 圓 50 錢
 { 雜誌と年鑑とでは——年 5 圓 50 錢

萬國エス協會 (Universala Esperanto-Asocio) の月刊雜誌です。大さ菊倍判 20 頁位。全部エス文。エスペラント運動について知りたい人。エスペラントを勉強したい人は御購讀を。

Heroldo de Esperanto——年 6 圓 25 錢

エス文のみの週刊新聞。四六四倍判 6 頁。外に附録等あり。エス界の事件を敏速に報道する點に於て世界無比。又エス語で新しい事件をしるにも好適。

Bulteno de Internacia Scienca Asocio Esperantista

年 1 圓 10 錢。勉強の雜誌といふよりも scienco 方面のエス運動の協力のため I. S. A. E. へ入會下さい。年四回上記 Bulteno が出ます。

- 【注意】1. 以上の雜誌は送金を當會で取扱い雜誌は先方より直送させます。
 2. 當會へ送金の際、住所姓名全部振假名 (又は全部ロカマ字) を附する事。振假名を忘れたものは取扱はず。
 3. 途中で條件を變更される事はお断り。轉居は先方へ。
 4. 本年上記雜誌購讀中の方で引繼ぎ購讀せらるゝ方は特に其旨御明記の事。

以上の外の雜誌は當會で取次ません。S. A. T. の雜誌は本年から當會で取次ませんからすべて下記の柏木エス會へ御申込を

東京市牛込區 財團 日本エスペラント學會取次部
 新小川町3-15 法人

SAT

Sennacieca Asocio Tutmonda 入會及び雜誌購讀を取次きます。會費購讀料は下記の通り。御送金は振替貯金にて。雜誌は獨逸の發行所より直送す。住所氏名は必ずフリガナ付の事。

S.A.T. 入會金 40 錢		S.A.T. 會費(年) 1 圓 50 錢		
Sennaciulo (週刊菊倍判12頁)	一年分 會 員 4 圓	半年分 2 圓	三ヶ月分 1 圓	
	非會員 5 圓	2.5 圓	1.25 圓	
La Nova Epoko (月刊菊判32頁)	會 員 2 圓	1 圓	50 錢	
	非會員 2.5 圓	1.25 圓	65 錢	

(以上全部を通じ送金料十錢を別に申受く)

S.A.T. に就ては本會發行『無産者エス運動の現勢と將來』(送料共 12 錢)を讀め

東京市外中野町本郷 267 柏木エスペラント會 振替東京 35659 番

HOMARANISMO の聖典!!!

増訂普及版

プリヴァ博士原著
松崎克己君和譯

柳瀬正夢裝幀

愛の人ザメンホフ

[Vivo de Zamenhof の和譯]

四六版二百餘頁 定價 八拾錢 送料 六錢

……國際語としてエスペラントが認められて來た今日、單に實利だけからして、此の語を學ばんとして集ふ人々も多くなつた。「言葉は單に手段である」ザメンホフは云つた。今日醒めつゝある人類が誤れる既往の途に再びすることを警しめるために、現世の淨土出現を告げ知らせるために吾等が殿堂の鐘を打ち鳴らすべき時が來たのだ。エトモン、プリヴァの“Vivo de Zamenhof”の發行せられた時吾々は打つべき鐘の撞木を手渡された様に思つて雄躍した。自分が云はんとしてゐた所を書してある。これだ。……

我が心の愛弟松崎克己氏がその譯を見事に仕遂げてそれを示された時私はどんなに喜んだであらう。……本書が今、吾々の心の叫を傳へる第一の鐘聲となつて世に送り出された。私は心から恵まれたる私が同胞のために祝福したい。……

おゝ吾々の感激、それがやがて全人類の感激となる日は近づきつゝある。

鏘鏘。人類人のむれがつきまなす禮讃の鐘の音は今や曉の靄を通じて朗やかに世界の上に渡つてゆく。白みゆく曉の色につゞく緑の大空には「偉大」が動きまつてゐる。希望に輝くはれやかなる瞳。人類愛の淨火燃ゆる胸。『愛の人ザメンホフ』の一卷を手にして吾等は茲に立上つた。……(小坂氏序文の一節)

増訂版は附録「人類語史瞥見」中の「人類語年表」が從來百〇九種であつたのを今回は新材料により五百餘種に大增補をした。

東京市牛込區新小川町3の15

★

振替口座東京 11325 番

財團
法人

日本エスペラント學會